先輩と僕

目次

春

四月Ⅲ　～制服デート～　3
四月Ⅳ　～お弁当～　4
五月　～おうちデート～　8
六月　～エスケープⅠ～　16
冬　～八歳～　19
春　～十六歳～　23
四月Ⅰ　～雨～　30
四月Ⅱ　～帰り道～　34

夏

七月Ⅰ　～二人乗り～　53
七月Ⅱ　～番号交換～　57
七月Ⅲ　～エスケープⅡ～　60

秋

九月　～お月見～　73
十月Ⅰ　～しょっぱい味～　89
十月Ⅱ　～秋の花火～　90

冬

十一月　～ホッカイロ～　95
十二月　～モーニングコール～　100
一月　～おうちごはん～　105
二月　～天体観測～　106
三月Ⅰ　～空に近い場所で～　108
三月Ⅱ　～卒業式～　114
二度目の春
四月Ⅴ　～デート～　127

あとがき　131
136
141
142
144

春

四月Ⅲ　～制服デート～

「スレイン」
名前を呼ばれて、右隣の仏頂面をじろりと睨む。
「先輩をつけろ」
大きな目を瞬いて、口を尖らせそいつは言う。
「…スレイン先輩」
「何だ？」
界塚伊奈帆は、制服のポケットから細長い紙切れを取り出した。二枚。
「明日。映画に行こうよ」
映画のチケット。今のご時勢、まだそんなの持ってる奴いるのか。
「嫌だ」
「予定あるの？」

返事をするのも面倒くさい。スレインはため息を溢しつつ、通学路の並木を見上げた。
桜並木を後輩と並んで歩くとは、何とも青春真っ盛りといった光景だ。チケットの絵面はテンションの高そうな極彩色の男女数人。これで桜の花びらでも舞い散ろうものなら、恥ずかしくて死ねる。しかし見上げた木々は幸か不幸か瑞々しい葉桜だ。
なんだっけ。予定か。
「ないけど。単純にお前と二人で映画に行くのは気が進まない」
「何で？」
「うるさそう。いろいろ」
界塚が降参のポーズをした。両手を肘から上げるホールドアップの姿勢。指先に挟まれた洋画の券が風に揺れた。
「わかった。何も言わない。前評判も制作サイドのマル秘コメントも、ちょいネタ、感想での元ネタやオマージュの引用、その他諸々全部やめる。だから行こう」
……事前の準備が重い。まあそれは置いといて。
「…お前、それじゃあ何しに行くんだ？そこまで興味があるなら、一人で行ったらいいだろう」
わかってない、と言いたげに首を振り黒髪が靡いた。こいつ、表情に乏しいがリアクションはオー

バーかつ古いな。
「一応これ、デートの申し込みなんだけど」
ポーカーフェイスを装っているが耳が赤い。デートの申し込みが映画だなんて定番中の定番だが…。ん？ちょっと待て。
「…付き合ってたっけ、僕ら」
「僕の中では」
いやいやいや。
「告白は…」
「何回もした」
…あれ？そうだっけ。
「返事をしたっけ…」
界塚はぐぐ、と口元を引き結んだ。第一印象は無表情。それは最近になって朴念仁に変わった。
「一回目と二回目の時、気の迷いで断ったみたいだけれど。こうして何だかんだ一緒に帰ってくれているということは、まだ振られ確定ではない、と、思う…」
…んだけど。

急に自信なさげに口を窄める。可笑しくてスレインは吹き出した。
「昼ご飯、奢れよ」
ぱあっと赤みの強い目が輝く。なんか…こう…すごく嬉しそうだ。そうか、わかった。こいつ、目でわかる。表情筋は怠け者だが、目はこれ以上なくわかりやすい。だったらこれから、いまいち掴み切れない後輩の考えは目を見て読もうとも思うのだけれど、とそこまで考え目を逸らす。
あまり、じっと見たくない。こいつの視線は真っ直ぐ過ぎて。
「何がいい？」
上目遣いを横目で見下ろす。食べ物のことを考えて腹がくう、と鳴った。
「ハンバーガー」
最近、食べてない。安価だし、映画館帰りならどこでも食べられるだろう。と僕は思ったんだ。
「具は？買い出しに行こう」
たたた、と界塚が軽やかに前に躍り出た。右手を引かれてつんのめる。…こいつ。どさくさに紛れて今、手を握ったな。
というか、え？
「今から？…てか、作るのか？」

「当たり前。明日はハンバーガー作ってくるから、映画の後どこかで食べよう」
ええ？
反論する間もなく手を引かれスーパーの自動ドアをくぐる。こんなところ誰かに見られたら…。
……ん？これってもしかして、デートなんじゃないか？

四月Ⅳ　～お弁当～

「スレイン」
二階廊下で背後から呼びかけると、スレインが振り向いた。うわ、怖い顔。
「…だから、先輩をつけろって。学校だぞ」
「スレイン先輩」

機嫌を損ねるのは得策ではないので、素直に言うことを聞く。これからお願い事もあるし。
「何だ？」
昼休み。教室にいないと思ったら、こんな別棟をふらふらしているんだから。おかげで、五限目の予鈴まであと十分しかない。
…まあ、少しくらい遅れてもいいか。うん。今日もいつもの通り不機嫌そう。もっと笑えば…とはいかなくても、柔らかい表情がみたいものだ。
よし、言うぞ。
「お昼を一緒に食べようよ」
「嫌だ」
予想以上の即答。「よ」が聞こえる前に「い」が飛び出してるだろ。速すぎ。
「どうして？」
当然の疑問をぶつけると、スレインは重くて澱んだ溜め息を吐いた。吸い込むと身体に悪そう。
「お前と顔を突き合わせて食べるのは気が重い」
そういうことをはっきり言う。けど、そこも好きだ。いくら怖い顔しても、溜め息で毒を吐いても、今日は僕は引かない。そもそもこれまで引いた試しなんてないけど。よし、切り札だ。

「お弁当を作ってきたんだけど」
スレインが表情筋を強張らせて沈黙した。そして数秒後。
「…作って？きた？」
「スレインの分」
ずい、と前に出した弁当包みと僕の顔を交互に見て、口をぱくぱくさせている。……いい反応だけれど、そんな、白昼に幽霊を見たような顔をすることないんじゃないか。
「ほらほら、行こう。屋上？校庭？食堂？」
ぐいぐい背中を押すと、おい、と覇気のない怒声が返ってきた。よし、もう一押し。
「お茶もあるから。あったかいの」
スレインが大きく息を吐く。肩を落として、観念したみたいだ。
「……屋上」

❀

四月と言えど、屋上は寒い。

給水塔の壁に寄りかかり一人分のスペースを開けて並んで座る。日当たりの良い場所を選ぶと、寒さはまだましだった。スレインが怪訝そうな顔で膝の上の弁当箱の包みを解き、蓋を開ける。

「すご」

聞こえないくらいの声量の誉め言葉。単純だけど、こういうのすごく嬉しい。手を合わせての「いただきます」、知らない人が多いけれど、この人こういうことはちゃんとしてるんだ。そして、卵焼きを一口。もぐもぐ、ごくん。

「…美味しい」

「でしょ」

作ってきて良かったな。あと、勇気を出して誘って良かった。

自分も弁当箱に箸を伸ばす。僕が卵を口に入れた瞬間、スレインが界塚、と名を呼んだ。咀嚼しつつ顔を向ける。スレインは弁当箱の中身を見つめたまま箸を止めている。

スレインが僕の名前を呼ぶのは珍しい。いつもは、お前、とか。なあ、とか。そんなのだから。

「何？」

何か深刻な話かもしれない。飲み込み口の中が自由になって聞き返すと、スレインは視線を合わせず僕に言う。

「どうして、僕に構う？」
この問いかけはこれで二回目。なるほどな。生真面目というか。なんというか。でも、そこが好きなんだけどさ。
「この間、言ったよね。好きだからだよ」
「なんで？」
好きになるのに理由もへったくれもないんだけど。……でもこれは、今言っても分かってもらえそうもないし。
「まだ考察中」
考え中だということにする。
春風とは名ばかりの冷たい風が吹く。スレインの髪が靡いて首筋の皮膚が露わになった。第一釦の飛んだシャツの襟元、陽光に晒された白すぎる肌に赤い痣三つ。
「…変なの」
スレインは箸を持ち直し今度は豚の生姜焼きを口に入れた。しっかり噛んで、一度に飲み込んで、喉仏が上下した。
釈然としないようだが、スレインの中では釈然としていることを見つける方が難しいだろう。

「これさ、僕が作ったんだけど」
「へえ」
「姉貴の分と、いつも二人分作るんだけどね」
そこで視線を感じた。控えめな、見返すとそっと逸らされる真剣な眼差し。スレインは優しすぎるんだ。多分、だからいつも傷ついてる。
「二人分も三人分も変わらないから」
「…そうかな」
三人分の方が、効率がいいのは本当。余らないし。嘘は言ってない。下心は過分に含まれているんだけれど。
「明日も、一緒に食べよう」
スレインはプチトマトを口に放り込んだ。左の頬を膨らませて噛み砕く。口の中で赤い球体が潰れ砕かれ身と内部が混然一体となりどろどろになる様子を閉じた口元を眺めつつ考える。こんな感じかな。スレインの中身って。
ごくり。
「…まあ、気が向いたら」

「やった」
スレインが今度は白米を口に入れた。頬張る横顔が空を見上げた。春の空。梅雨の前の晴れ過ぎた空。
さて、明日の献立は何にしようかな。

❀

翌日。
「よかった。今日も来た」
昇降口で張っていたら、スレインが始業前に現れた。今日はちゃんと時間通りに来られたみたいだ。
「おはよう。スレイン」
「…ああ、おはよう」

心なしか表情は昨日より穏やかに見える。挨拶もしてくれるし。なんか嬉しい。
スレインは肩に引っ掛けたよれよれの鞄に右手を突っ込んだ。何かを取り出し、外履きのまま簀子の上の僕に手を伸ばす。
「これ」
差し出されたのは無色透明の炭酸飲料。受け取ると、まだ冷えてる。ボトルの内部でシュワシュワと細かい泡が生まれて消えて、朝日がキラキラと乱反射した。
「くれるの？」
スレインは下駄箱で外履きと内履きを入れ替え、トントン、と爪先で簀子を叩いた。そんなことしても、潰れた上履きの踵に足が収まることはないんだけど。癖かな。
「…当たりが出たんだ」
そっぽを向いて言うけれど、頬が赤い。太陽の照り返しではなく。手の平の冷たさと裏腹の顔の赤さ。……えっと。お礼のつもりかな。お弁当の。
「ありがと」
「別に」
教室へ向かう後姿に駆け寄ると、「僕の後ろに立つな」と殺し屋みたいなことを言われた。だから

隣に並んでみる。

五月　〜お家デート〜

「単刀直入に言うよ」

「……何を？」

校門からバス停への道すがら、界塚伊奈帆は大きく一度瞬きし一歩を踏み出した。物理的にも。スレイン・トロイヤードは仰け反りつつも、動きを止めて言葉を待った。

ここで相手をしてやらないと、後々面倒なことになる。いい加減分かってきた。

「今から一緒に、僕の家に行こう」

唐突と言えば唐突である。まず、どこに住んでいるのか知らないし。それ以前に名前と学年以外

も知らない。気軽に家に遊びに行くような間柄ではないと思うが。
「…何で？」
一応理由を聞いてみる。
「一緒に勉強したり、おやつを食べたり、密室でちょっといい感じになって、あわよくばいろいろしたい」
いつも思うが、何でも正直に言えばいいというものではない。いろいろって、何をする気だ。何を。
「…単刀直入すぎる」
だから前置きしたでしょ、と界塚はほくそ笑んだ。
「で、どう？」
「どうって言われてもな…」
並んだ距離が狭まる。こんなところ、誰かに見られたら仲がいいと思われてしまう。それはちょっと。
「予定ある？ないでしょ？」
「ないけど…」

「決まり」
さあ、早く行こう。そう言って界塚はずんずん歩みを進めた。僕の右手を引っ張って。
こいつ、最近何かにつけて手を握ってくる。図に乗ってるな。
「おい…、誰も行くとは言ってない」
後ろ頭にそう投げかけると、界塚は首だけ回して振り向いた。
「おやつに、カステラがあるよ」
あと、アイスも。
「…」
カステラとアイス。そんなのずっと食べてない。
ぐう。
……腹も減ったし。
「決まりだね」
精一杯の意地を溜め息に込めて、学生鞄を持ち直した。わざとゆっくり歩いてみる。界塚は歩調を緩めた。また溜め息が出る。こいつといると、溜め息ばかりが量産される。全く。
「…いろいろって、何する気だ？」

「何がいい？てか、どこまでならいい？」
ど、どこまで？…こいつ、どこまで本気なんだか。
「…同じコップで、コーヒーを飲むくらいかな」
伊奈帆が振り向いた。こちらの意に反して、朗らかな笑みを浮かべている。へえ。こいつ、一応笑えるのか。
「思ったより前進。でも、お茶にしない？カステラだし。僕、あんまり苦いのはちょっと」
突然子どもみたいなことを言い出すから、吹き出しそうになる。そういや、弁当の卵焼きは甘めの味付けだったな。

六月　～エスケープⅠ～

すれ違う好奇の視線を避けるため、斜め下方の窓枠を見つつ廊下を歩いていた。
のに。
「スレイン」
「！！…だから」
「スレイン先輩」
素早い上にまともな返答。全く、急いでるのに。
「…何か用か」
「学校さぼって、今からどこか行こう」
一限の後の休憩時間。教室移動の最中、背後に突如として界塚伊奈帆が現れた。全く、気配を殺して近づくな。こいつは行動も言動も突拍子がなくて意外性の塊で、何というか、心臓に悪い。
そして電光石火のこの提案。
…いや、待て待て。
「お前…びっくりする…」
「どう？」
なぜ話を続ける。いや、それより何をのたまうんだ、お前は。

「どうって、今から化学だけど」
「たまにはいいじゃん」
…そういうキャラだっけ、お前。
確かに僕はお世辞にも、品行方正とは言えない。遅刻も、無断欠席も少なくはない。しかし。学校の校舎で、廊下で、休み時間に白昼堂々、「ちょっと購買行こう」くらいの気安さでさぼりの計画を立てるな。…と僕は言いたい。
しかし。こいつのこう、何というのか。きらきら、という形容詞が当てはまりそうな目を見ていると、そういう言葉が出てこない。
「えっと…」
「こっそり行こう。校舎裏の職員駐車場で三分後集合」
それだけ言うと、界塚は風のようにいなくなった。がやがやと廊下を忙しなく行き交う人の群れ。予鈴が鳴る。なんて呑気な音だろう。
手の中の教科書ノート、凹んだカンペンが重さを増したようだ。開くのも面倒くさい。足は当初の目的地から遠ざかるよう前後に動きだした。仕方がない。あいつ、言い出したら聞かないんだ。一回くらいいいだろう。

しかし。

「…三分後って」

早。

冬　～八歳～

本当はスレインのことを、ずっと前から知っていたんだ。

僕はあの日、一人で公園にいた。八歳だったかな。確か一月で夜の七時くらいだったと思う。ブランコに座って、足で地面を蹴って、時々手に息を吹きかけて。すごく寒かった。あと、空腹だった。朝もお昼も食べていなかったから、当然と言えば当然だった。

なんでそんな日にそんなところにいたのかっていうと、たまたま。家出みたいなものかな。帰るつもりはあるんだけど、まだ帰りたくなくて。

僕とユキ姉は、施設を追い出されることになった。明日が引っ越しの日。原因は僕。

一人でいられる場所が欲しかった。

ガサゴソと音がして、振り向く。

ブランコの後ろの垣根から、子どもが一人現われた。僕の真後ろ。距離は二メートルくらい。だ

から、目が合った。そして驚いたことに、そいつは近づいてきた。
「何してるの？」
日本語だ、とどうでもいいことが最初に浮かんだ。理由は多分、そいつの髪も目も肌も色味が僕とは違ったから。今思えば、僕にもそんな感覚があったんだと、今では変な感じだ。
「…別に」
「寒くない？」
「…ちょっと」
「だよね」
ふわりと首に温かい感触。網目の大きな毛糸のマフラー。これ、今の今までこいつが着けていた。
「何？」
「あげる。僕はなくても、平気だから」
彼は隣のブランコに座って、持っていた包みを広げた。
「食べる？お父さんに持っていくから、あんまり沢山はいけないんだけど」
二、三切れなら。
そう言って目の前に差し出されたのは。お弁当箱に窮屈そうに並んだサンドイッチ。具は赤と黄

色。ジャムだ。
「何で？」
見ず知らずの相手に、家族への食事を分け与える理由が分からない。
同い年くらいの男の子は、眉を下げて笑った。人の好さそうな、人に騙されないか心配になるくらいの優しい顔。彼の大きな猫目が上下に動いた。
「膝…あと、頬っぺた。僕も、意地悪されたことがあるから分かる」
思わず頬に触った。もう、腫れは引いたと思ったけど。膝は瘡蓋だし。でも、この子よく見てる。
「一人になりたいの、分かる。でも、ご飯は食べたほうがいいと思って」
はい、と再度押し出されたサンドイッチの端の一つを抓み取る。黄色いやつ。噛むと、ママレードジャムの苦味と甘味が口の中に広がった。美味しい。今まで食べたどんなサンドイッチより。僕が食べる間、彼は何も言わず砂場や街灯を眺めて待っていた。いいやつだな、と思った。
「…ありがとう。一つでいいよ」
「そう？」
素早く荷物をまとめて立ち上がる。長袖と長ズボンで、その子の身体に傷があるのかは分からなかった。

「家族は？」
軽い声でその子が聞いた。だから簡単に言葉が出た。
「お姉ちゃんが一人」
お姉ちゃんかあ、という鸚鵡返しが嫌じゃなかったのは初めてだった。
「僕は、お父さん。今日も帰ってこないから、ご飯を届けてあげようと思って」
こんなのしか作れないけど、とその子は照れくさそうに笑う。久しぶりに僕も笑った。笑うとなんかあったかい。
「帰るなら、途中まで一緒に行く？」
「うん」
立ち上がると、彼の方が背は高い。

❄

誰もいない住宅街を二人で歩く。街灯の寒々しい光の中で、僕は初めて他の誰かに自分のことを話した。

「引っ越すのは明日？」

聞き上手な彼は僕が黙り街灯三つ過ぎた頃、そう聞いた。

「うん」

「この辺？」

「そう」

ここは知らない町だ。僕の知らない場所だ。その印象は、今日一日過ごしても変わらない。あの場所は嫌だ。でも、ここがいいかは、まだわからない。

街灯を境に、影が前にいったり後ろにいったり。夜の散歩は初めてではないけれど、影を見て歩くのは初めてかもしれない。

「じゃあ、同じ学校になるかもね」

それを彼は淡々と言ったので、やっぱりいいやつだなあと思う。

「そうかな」

「何年生？」

「二年」
「僕は三年」
そっか、年上だったんだ。でも言われてみるとそんな感じはした。急に、この子の住んでいる家や通う学校の存在が現実味を帯びて意識させられた。朝になったら、僕も新しい家に行くんだ。それで、次の日には新しい学校に通うようになる。
そこにこの子がいたら嬉しいな。
「僕はこっち」
ずっとこの道が続くといいと思ったけれど、分かれ道だ。
「サンドイッチ、ありがとう」
分かれ道に足を向け、彼は歯を見せて笑った。
「じゃあね。また会えるといいね」
「うん」
彼は手を振った。
「バイバイ」
「バイバイ」

僕も手を振って、初めて「バイバイ」なんて言って、後ろ姿が消えて。そして気付いた。
「名前、何て言うんだろう」
聞けばよかった。

❄

そう。名前を聞けばよかった。
結局、次の学校に彼はいなかった。
その公園には何回も行ってみたけれど、二度と会うことはなかった。
時々、休日の朝御飯にサンドイッチを作って食べる。具はジャムからハム、タマゴに変わっていった。あの夜の道と笑顔が思い出になるくらいの年月が流れた。
――――そして。

春　～十六歳～

砂利の音が近づいてくる。タブレットから顔を上げると、いかにもだらだら、という形容が相応しい歩き方でやってきた。嫌々来た、ということを全身で表明している。その目論見は、僕以外の人間には効果があるかもしれない。

「スレイン」

「…」

呼びかけるが、むすっとした顔、返事はない。当たり前か。急だったし。でも、何だかんだ、ちゃんと来てくれた。こういう所なんだよな。

「じゃあ行こう」

駐車場から道に出て、通学路とは反対方向に歩き出す。ゆるい坂道を上る。スレインの足音を僕の半歩後ろから感じる。

「スレイン」
今度は視線が返ってきた。うん、目つきが悪い。でも、怖くはないんだな。
「…先輩をつけろ」
本当、こういう所。青春は当たって砕けろと言うけれど、僕は砕けたことがない。スレインはそういう、詰めが甘いというか、お人好しというか、押しに弱いというか、ちょろいというか、まあとにかくそういう人で、いつだって僕の思い通りになってしまう。あんまり困らせたくはないんだけど。
すごく優しいんだ。昔から。
「スレイン先輩」
「…何？」
不機嫌そうな返事と不機嫌そうな顔。吊り上がった眦の目つきは最悪。でもさ。ほら、こういう時。ちゃんと顔を見てくれるんだ。嬉しくて、つい調子に乗ってしまう。僕もまだまだ子どもだな。
「呼んでみただけ」
スレインは左右の表情筋をちぐはぐに動かして、美形も台無しな間抜け面になった。不思議だなあ。どうしたらあの、どこか影のあるクールビューティーがこんなことに。

「…はあ？」
声も、相当間抜けだ。
「スレイン」
追い打ちをかけると、スレインは頭の上に疑問符を沢山浮かべて首を捻った。
「……変な奴」
不揃いな表情の口角は引き上がり呆れ声には小さな笑みが含まれていて、春風に散った青葉が僕らの間を横切った。
「…小腹が空かない？コンビニ寄ろうよ」
歩き出すと肩が並んだ。まだ僕より少し高い目線が、一度空を映す。
暗い場所では気づかなかった。明るい場所で見ると、彼の瞳はビー玉に透かした空の色をしている。俯き髪で瞳が隠れる。ついじっと見てしまった。
「いいけど、何か奢れよ。お前に付き合ってるんだから」
「うん。何がいい？」
「…ジャムパン」
多分イチゴだ。

「オーケー、スレイン」
だから、とまた小言。気づいてないのかな。わざとなんだけど。
伊奈帆はアスファルトを軽やかに蹴る。
名前が呼べるって、いいもんだ。

四月Ⅰ　〜雨〜

別に、探していたわけじゃない。

だって子どもだったし。まあ、今でも僕は十分に子どもなんだけど。とにかく、新しい生活と時間の経過により、あの公園での出来事を僕はすっかり忘れていた。ほんの時々、夜に近い時間の公園を通る時や、オレンジ色のマフラーを見る時。サンドイッチを食べる時にそういえば、って過る程度。

だから。初めて見た時も気付かなかった。

あの日は雨だった。

その日、僕は放課後の図書室で時間を潰していた。部活動には所属していないから放課後は直帰

することが多いんだけど、その日は傘を忘れていたんだ。午後から晴れるって予報だった。雨脚が緩むまで、と窓際の席で適当に選んだ本を読んでいた。哲学の本だったと思う。結構、興味深い内容だった。集中していたと思う。僕は何かに夢中になると、周囲の音がさあっと遠退き聞こえなくなる。だから今となっては不思議なんだ。

僕の耳が声を拾った。

大きな音じゃない。距離のある話し声。無視できるくらいの雑音。でも、何か嫌な感じがした。とはいえ、わざわざ見に行くお人好しでもない。いっそ、聞こえないくらいのところへ席を移動しようか。それか、もう諦めて濡れて帰るか、と窓の外を見た。本はまだ百十一頁。全体の四分の一くらい。雨は止みそうにない。

ガン、という大きな物音。バラバラと、多分本が落ちる音。

流石に無関心を決め込むこともできなくて僕は立ち上がった。目の端に急ぎ足で退室する数人の男子生徒が見えた。受付の図書委員は、異変に気づいていないようだった。僕はとりあえず、何が起こったか確認する。

窓際の通路から本棚の間を見ていく。雨の図書室は電灯があっても薄暗い。湿った空気と雨の音。そして突き当たり。一番奥。黴っぽい本ばかりのゾーンに彼がいた。

僕の背には窓があり、影も届かない最奥にいた。本を積み上げて持って元あった場所に戻して、腕の中の残りはあと二冊だった。

幽霊、という言葉が頭に浮かんだ。神社とかで見るヒトガタ。そんな感じ。暗い場所で白く発光してるように見えた。目の錯覚だけれど。ヒトガタの髪も肌も服も白くて、すぐにそれは髪と肌は色素が薄く、服はシャツ一枚だからだと気付いた。床に落ちて重なった布と無造作に転がった左右の上履き。

その伸びた腕。手首の釦は取れていて、露わな手首は不安になるほど細かった。

最後の本を戻して、服を整えて、ヒトガタは奥の通路へ進みいなくなった。僕がいたことには。ずっと見ていたことには、気づかなかったみたいだ。

何があったのかは分かった。

どうしてなのかは、まだ分からない。

そして、彼が誰なのか。

なぜだか、あの子の名前を知らないことを思い出した。

図書室の幽霊の名前はすぐに分かった。有名人だった。
名前は、スレイン・トロイヤード。三年E組
彼の評判は、説明が難しい。
格好いい。美形。意外と優しい。
無口。不愛想。
遅刻魔。休みがち。
服装が乱れがち。
不良。
いつも一人。
これに、僕が見てしまった事実と考察を照らし合わせると、こうなる。

スレイン・トロイヤードは、家庭環境に問題を抱えていて学校では陰湿ないじめを受けている。
言葉にすると、これだけのこと。

スレインのゴシップを知ったからと言って、僕は幻滅したわけではないし、好きになったわけでもない。そもそも、うら寂しい公園でサンドイッチとマフラーをくれた恩人を探していたわけでもない。僕だって、そんなにお手軽じゃない。

原因は過去と現在の違和感だ。どうして、あの陽性の少年がこんなことになったのか。あの屈託のない笑みと似ても似つかない現在の険しい表情。好奇心の一言で片づけるのは不謹慎だろうか。

まず、目で追うようになった。学校の廊下や階段、踊り場で。スレインは明後日の方向を見て、誰とも目を合わせないように通路の端を歩く。僕はそれを通行人の隙間から見る。

確かに、服装が良くない。釦があちこち取れていて、生地は伸びてだらしない。しかし、登校後は割とちゃんとしてる。シャツはイン、釦は残ったところは留めている。ネクタイだってしている。鞄も持ってきているし。不良を気取っているわけではないだろう。

顔は不愛想で不機嫌そう。口を開くのを見たことない。時々、目が腫れぼったい。

あと、いつも一人。に、見える。

「っあ…！や、…ッ！」

「…押さえとけ」

見たくもない現場に通りがかったのは、気にはなっていたのだろう。放課後の別学年の空き教室。足がこの場所へ向いたのは初めてだ。棟も違う。階も違う。昇降口へは相当な遠回りだ。何となく帰る気になれなくて、図書室で本のページを捲っていた。内容は覚えていない。下校を知らせる校内放送で荷物を纏めて立ち上がり、考え事をしているうちにこんなところに来てしまった。

中で起こっていることは理解できた。次に、僕が入っていくかどうかを思案した。その間にも、壁の向こうから次第に大きく忙しなくなる声と音が、エスカレートする行為を物語っていた。それでも僕は決めかねていた。

だって、別に好きじゃない。

確かに恩はあるし、嫌いじゃない。当然。昔とのギャップには多少驚かされたものの、話くらいはしてみたかった。僕のことを覚えているか。結局、どこの小学校に行っていたのか。今、お父さ

んはどうしているのか。そういうことを、二人で話してみたかった。
ガタン、と恐らく机の倒れた音。
「〜〜〜ふ、っ…は、ぅあ…！！」
「…やっぱいいな。中がすげえ」
「早く代われよ」
聞きたくもない声と会話と浮かぶ想像。今何を。
掌に爪が食い込んで痛い。
…くっそ。
もういい、…入ろう。面倒なことになるだろうがそれはそれだ。
「…おい、誰かくるぞ」
ドアに手を掛けたと同時、どっと快活な笑い声と軽やかな足音ががらんとした廊下に木霊した。
音のした方を見ると、三人の女子生徒が廊下の端からなにか嵩張る荷物を持って談笑しながら歩いてくる。
しんと静まり返った室内。
また、朗らかな笑いと黄色い声。

僕はそのまま待った。六つの踵が鳴り響く廊下。潜めた息が聞こえるような室内の静寂。

近づく生徒の一人が、僕を認めて何かを囁いた。多分、ネクタイの色のことだろう。彼女らは上級生だ。僕は会釈をして、彼女たちとすれ違った。

僕がいるのは後方のドアで、壁の向こうでがさごそ音がした。前方の扉が開き、屑みたいな連中は五人。僕には気づかず廊下を走り階段を駆け下りていった。

開いた扉の前に立ち、僕は教室の中を見た。

いた。

一人、前から二、三列目の乱れた机の中心で天板に背を預け、放心したように手足を投げ出し座り込んでいる。人形のように固く止まった表情と、瞬きを忘れて静止した瞼。落ちる影。

オレンジ色の夕日。

風。カーテンが翻り。

彼の顔が窓の外を見上げた。雲しかないのに、彼は笑った。笑っているのに、頬は涙で濡れていた。

このとき抱いた感情に、何と名前を付ければいいのだろうか。

スレインが僕に気付いたのは、衣服を整え倒れた机を整然と並べ、床に散らばった教科書や文房具をよれよれの鞄に詰め込んで。袖で顔を拭って足を扉へ向けた頃。十分くらいは経過していたと思う。僕を見て、敵に見つかった肉食獣のような様相で充血して赤く腫れた目を吊り上げた。

「どいてくれ」

掠れた声だが、腹に響く。引き戸のサッシを挟んだ三歩の距離で向かい合う。

「…先輩」

スレインが眉を顰め視線を下げ、ネクタイの色を確認した。眉間の皺が増えた。

「どけ」

怖い顔。怖い声。でも、僕にはそんなの関係ない。知ってる。変わっていない。この人は何も。寒い冬の公園から。二人きりの住宅路から。歯を見せて笑ったあの日から。名前は分かった。でも、名前しか知らない。話がしたい。もっと知りたい。今のこの人のことを。

窓の外は燃えるような夕焼けだ。

一歩踏み出し、アルミサッシを跨ぎ越す。

「先輩、僕と付き合ってください」
眉間の四重の皺が一気に消えた。ぽかん、という脳内の擬音。たっぷり十秒の沈黙の後出てきたのは。
「…はあ？」
予想外の気の抜けた声で。僕もなんだか気が抜けた。…なんか、本当。今更だけれど、あの時名前を聞いておけば良かったな、なんて。そうしたら、きっとあの夜を思い出にカテゴリ分けしなかったろう。
「好きです」
好きです、なんて。人間相手にこんなことを言うのは生まれて初めてだ。
「…馬鹿なこと。いい加減にしろよ」
「本気です」
「あのな」
スレインは呆れてものも言えないという顔で首を振った。伸びっ放しの髪が肩口で散り散りに跳ねる。
「今会ったばかりだ」

うん。君はね。
「僕は、以前から気になっていました。先輩が認識してなかっただけで」
「放課後の空き教室で輪姦されてたやつに、告白する馬鹿がどこにいるんだ」
あ、僕がいたこと気づいてたのか。それともカマをかけたのか。どうせ見てたし、何ならその前も知ってるから。
「ここにいる」
そう答えるとダン、と足が床を蹴った。苛立ちまぎれの行動だとしても、痛いと思う。
「哀れみか？同情か？それとも、ちょろいと思ったのか？」
怒ってる。すごく。僕でも、たじろいて、足が後ろに引きそうなくらい。でも、もう決めたんだ。踏ん張る。
「違う」
言っても、今は伝わらないだろうけど。睨んでもどうしても僕が一向に扉の前から退かないので、スレインは溜め息一つそっぽを向いた。
「…前から知ってた？ヤられてるのを？」
釦の少ないシャツの布の間から覗く赤い痣は大小七つ。どうやって付いたか想像して血流が速く

なる。背筋がざわざわつく。口の中がからからに乾く。
「薄々。でも現場を見たらちょっと」
服を身に着ける前に見えた傷や痣や汚れや足跡。次々脳裏に浮かんで消えて、また浮かぶ。
「ちょっと？」
「ショックを受けました」
「はは、何だ、お前」
自嘲するような、嫌な笑い方だ。垂れた前髪を掻き上げる肘が目に留まる。ぶつけたのか、擦ったのか。右肘の外側に血が滲んでいた。
「…血が出てる。絆創膏くらい貼ろう」
「舐めときゃなおる」
鞄から絆創膏を取り出しじっと見ると、スレインは怪訝そうに僕を見返した。そのまま見ていると、視線を横に逸らしスレインは右腕を伸ばした。案外素直だ。
「…分かったよ。ほら」
ペリ、と封を切りシールを剥がし、絆創膏を貼りつける。赤い色がガーゼにみるみる滲んだ。
…この赤い血は、舐めたら甘いだろうか。

「…名前は？」
腕を二度曲げ伸ばししてスレインが聞いた。
「知ってます」
「違う。お前の名前」
そういえば、僕の名前を知らないか。あの時も言わなかったから。今更自己紹介。
――――八年越しの。
「界塚伊奈帆」
「スレイン・トロイヤード」
君の名前は知ってるって言ったのに。律義と言うか何というか。話を始めてものの数分で、僕は彼が全然怖くなくなった。
廊下を彼の斜め後ろ、スレインの影の中を歩く。背筋が伸びた清冽な影だと思った。それを踏む。また踏む。内緒の影踏み。自分の影でするより、ずっと楽しい。
「今度、返事ください」
「…何の？」
「さっき、告白したでしょう」

「ああ、冗談じゃなかったのか」
冗談に聞こえたわけ無いと思う。だからこれはただの減らず口だ。赤い廊下に長い影。影法師の僕らは、手や肩が重なって仲が良さそうに見える。
「一緒に帰りませんか」
「嫌だ」
そう言うとは思ったけど。
「じゃあ下駄箱まで」
「…チッ」
こっちは断らないんだな。すごく大きい舌打ちが聞こえたけれど。
誰もいない長い廊下。人の後ろを歩くのは、いつぶりだろう。すごく小さい頃に、ユキ姉の後ろについて歩いた気もするけれど、もうはっきり思い出せない。
埃と体液で汚れた背中は、真っ直ぐ伸びて綺麗だ。昼間何度も盗み見た時は、背を曲げて窮屈そうに歩いていたのに。
「じゃあな。お節介」
昇降口で手を振る。後ろ姿と伸びる影。今の言葉を反芻する。

じゃあな、ってことはまた明日会えるってことだろう。希望的観測を含めて。

翌朝。僕は誰より早く校門で待っていた。彼が遅刻するならそれで、ずっと待っているつもりだった。

もう何度目か、桜の落花に気を取られ数えるのをやめた停車音。バスから降りてくる金の髪が見えた。彼一人。もう始業を十五分過ぎている。僕らの他は、誰もいない。

仁王立ちで待つ。スレインが怪訝な顔を向けた。

十歩の距離で息を吸う。よし。

「好きです」

二メートル。桜の花びらが風で斜めに降った。スレインはピンクの雨の向こう側、ぽかんと口を開け、三秒くらい固まった。表情を大げさに不機嫌へ切り替え目を逸らす。

碧の視線の先には、地面に落ちて重なる桜。踏まれて汚れて、その上にまた真新しい柔い一片が。

「悪いけど…」

話しかけるな、と言い残す声と擦れ違う。僕は桜花の残骸を受け校舎に吸い込まれる後ろ姿を見

送った。

次の日の朝。
「あの、好きです」
「…昨日、断ったろ」

その次の日の朝。
「好きです」
「…頭が悪いのか？それとも、性格が悪いのか？」

そして今日。放課後。
「好きです」
「…しつこいな。どうしろって？」
よし。やっとこっちを見た。

首を振る下級生と、下駄箱に手を突っ込んだままの上級生。それが今の僕らの関係。
後輩の僕は言う。
「先輩の、返答が悪いんです」
先輩のスレインは首を傾げる。
「何？」
誰もいない昇降口で、僕は五回目の告白をした。その理由を説明する。
「僕は好きって言いたいだけだから、うん、って言ったらいいんですよ」
「…変なやつ」
「好きです、先輩」

「…どこが？」
聞くと思った。だからこう言う。
「まだ好きを満タンにしている途中なので、わかりません」
恋なのか、愛なのか、そんなのわからない。
「…つくづく、変なやつ」
界塚伊奈帆は学生鞄を背負い直し、スレイン・トロイヤードの後ろ姿を追いかける。肩を並べて、少し上方にある瞳を見上げた。
好きの理由なんて、まだ知らない。
でも。
「…今の笑顔って言えば良かったなぁ」
「声に出てるぞ」
きっと絶対、好きになる。

四月Ⅱ　～帰り道～

「…」

「…」

…痛いくらいの視線を斜め下から感じる。いつも小うるさいのに、今日どうして何も話さないんだ？

レーザービームのように照準を固定した橙の目。スレインは折れた。

「…何？」

ぱあ、と無表情に光が差す。どうしてこう、顔の筋肉を動かさず豊か過ぎる感情表現ができるんだ？

「好きです」

まさかの告白。往来で。待て待て。ここ、歩道の真ん中だぞ。
「はあ？」
「だから、好きです」
表情は真剣そのものだけど、お前。
「お前それ、何回目？」
界塚伊奈帆は一つ頷き即答した。
「十七回目と十八回目」
いや、そういうつもりで聞いたんじゃない。数えてたのか。ええと？何？十七回と、十八回？
「…気持ち悪いな」
「否定はしない」
あれ？そういえば。
「タメ口、いつからだっけ」
「四日前」
「一緒に帰るのは？」
「十日。二週間」

…記録表でもつけてるのか？
「お前、変わってる」

界塚伊奈帆は三秒ほど立ち止まり、スレイン・トロイヤードの背を追いかけた。
見上げた横顔。
「三回目」
「何が？」
うん。いいな。やっぱり、しかめっ面よりその方が。

三回目。
僕の話で、笑った数。

夏

七月Ⅰ　～二人乗り～

「お待たせ」

ゴムとアスファルトの摩擦音。放課後校門前で待ちぼうけていたスレインは、目の前に現れた後輩とその出で立ちをまじまじと見つめた。意外過ぎて。

制服。学生鞄は籠の中。そして彼が乗っているのは、どう見てもママチャリ。

あれ？界塚伊奈帆はバス通学じゃなかったっけ？えっと、そもそも、今から何しに行くんだっけ？

「お前、これどうした？」

界塚伊奈帆は、サドルに跨りハンドルを握ったまま方向転換した。

「カームに借りた」

わざわざ、借りて。

「ほら、乗って」

スレインは、界塚の背を一瞥し、その下に視線を移動。金属がくねくねした、銀色の頼りない荷台。え？何？ここに、乗れって？

「…大丈夫なのか？」

界塚が顔だけ振り向き、力強く頷いた。

「初めて乗ったけど、案外簡単だ。」

は、初めて？自転車に乗るのが初めて？

おいおい。

そうは思いつつ、もうどうにでもなれと荷台の上に跨る。…ええと、これ、どこ持つんだ？態勢を固定する前に、しっかり掴まって、という声と地面を蹴る足。慣性の法則に則り置き去りにされそうになる体を引き留めるため、咄嗟に両腕で腰に抱きついてしまった。迂闊だ。

ぐらつくこともなく、安定してスピードを上げていく自転車。いつもより早く通り過ぎる景色が物珍しい。

少し楽しいのが悔しい。

「…転ぶなよ」

「当然」

校門からの坂道を、二人乗りの自転車が駆け下りる。

七月　Ⅱ　～番号交換～

「スレイン、一緒に帰ろう」
「今日は駄目だ」
珍しく語気のはっきりした返答だった。僕は靴を履いて、昇降口で立ち止まった。スレインはまだ下駄箱に手を入れている。
「どうして？」
「用がある。帰り道が違う。それに、お前といるところを見られたくない」
取り付く島もないが、僕だってこれくらいでそっかじゃあ、という性格はしていない。

すたすたと通り過ぎようとする手首を掴む。細い。袖口の釦はない。そこから見える痕。擦過傷。瘡蓋の赤黒い線。堪らない気持ちになる。結局、スレインの事を何も知らないんだ。僕は。学年だって違うし、当然クラスも違う。家も知らない。最寄りのバス停の名前も。知っていることと言えば、好きなお弁当のおかずとか、押しに弱くてお人好し、とか。整理整頓がなってなくて、筆記用具が鞄の中で散乱しているとか。それと、案外涙もろいとか、本には折り跡をつける癖がある。学校では猫背で姿勢が悪いけれど、外では姿勢よく歩く。時々花を見下ろし空を見上げて。知っているのはそのくらい。学校を離れたらいなくなる距離感。電話番号一つ知らない。

「…これ、僕の連絡先」

ポケットの中にあったペンでスレインの手首の皮膚に数字とアルファベットを走り書く。メモも用意してたし、これは最後の手段だったんだけどな。

手首の内側。親指の付け根。極細のペン先で書かれたアドレスは遠目には約二センチメートルの黒い汚れにも見える。

スレインが腕を縦にして横にして渋面を作る。そして溜息と睨む目。睨まれたっていい。僕を見てくれるんなら。

「…油性ペンで書くやつがあるか。メモとか渡せばいいのに」

「捨てるでしょ」
「…捨てるけど」
本当、変なところで素直で正直で。僕はスレインが放っておけないんだ。
「じゃあまた明日。スレイン」
「先輩だって」
一足先に昇降口を後にする。後ろから特大の溜め息が聞こえたのを、夕日の眩しさで気づかない振りをした。

「これ、僕の連絡先」
「…お前もしつこいな」
消えかかった黒インクの上をまたなぞる。もう何回目だろう。

誰もいない下校間近の階段の踊り場。二階と三階の間で、僕はスレインの手首に今日も文字と数字を羅列する。一緒に帰るな、と言われる日には必ず。それは週に一、二回あった。その度柔く血脈の蒼い肌に針のようなペン先を押し付ける。スレインは呆れるばかりで抵抗もしない。それをいいことに僕はゆっくり丁寧に、前の文字を正確になぞる。かけられたことのない電話と届いたことのないメールを待つ気持ち以上に、今はこの行為自体が儀式めいて重要だ。

印のようなものかもしれない。嫉妬だろうか。それとも、ささやかな抵抗だろうか。現実への。

「夜、電話して」

スレインがいつものように母音の「い」の形に口を開き、動きを止めて口を開きなおした。

「なんで？」

いつもは嫌だって言う。理由を聞かれたのは初めてだ。

高い場所の小窓から夕日が差し込む。影が階段の三段目まで伸びている。膝と手と肩が重なって、僕らの影は存外仲が良さそうだ。スレインは赤い光に眩し気に目を細め、僕を見て口を閉ざしている。髪がいつもと違う色に見えて、そうやって動かずにいると別の人みたいだ。

「声が聞きたいから」

選ぶほどの言葉もなく、そのまま言った。スレインは数秒押し黙って、ふいと顔を横に逸らした。

そして、タン、タン、と階段を降り始める。ジャケットを着ていない、夕焼け色に染まった背に続く。肩甲骨の形が浮き出る薄い背中だ。

どこに行くんだろう。今から。

「見られたくないっていうのは、誰に？」

スレインが靴を履き替えた後聞いた。怒った顔が三和土から一段高い廊下に立つ僕を見上げる双眸。碧の色がこんなに熱く見えるとは。

「お前の、知らない奴」

吐き捨てるようにそう言って、スレインは大股で歩いて行った。

背が見えなくなって、夕焼けが落ちて、見回りの足音を遠くで感じるまでそこにいた。ポケットからスマートフォンを取り出し、静かな画面に一人ごちる。

「…そんな言い方ってある？」

スレインは、僕とそいつのどちらを守っているのだろう。

『ペット』

そういう噂。

僕の耳に入る噂話程度でも、そう。ということは、別の場所ではもっとひどい言われ方をしているはずだ。お父さんは、随分前に死んだらしい。幼い彼がサンドイッチを届けた父親。父子家庭だった。親類縁者もなく、盥回しにされたそう。父親の古い知人のそのまた知人が、不承不承引き取ったそうだ。今も、その家で世話になっている、らしい。この辺は気心の知れた友人と彼の担任に聞いた。

そう。ペット。

愛玩動物っていう言葉は気持ちが悪いな。

要するに、生活保護の対価は隷属。彼は釦の取れた服で、痣や痕をこしらえて、割といつも空腹で、それでも毎日学校に来る。きっと家にいたくないんだろう。でも、学校でもそういう連中の欲望の捌け口にされている。僕は一度見逃して一度見た。知らない所でどうかは知らない。僕がスレインに会えるのは基本的に休憩時間だけだから。始業前と放課後は捕まえられない時があるし。で

も、当然二回や二回ではないだろう。午前中に無かった痣が昼にあるのを見ると、机でもごみ箱でも窓ガラスでも、そこら中にあるものを蹴っ飛ばしたい衝動に駆られる。朝から何をしているんだ。

七月も二週目に入った放課後。僕は跡をつけた。確かに、帰り道が違う。

付け回している自覚はある。ただ、これは自分でもちょっとやりすぎかもしれないとは思ったけれど。でも、好きなんだ。好きな人がペットとか言われて、傷を作って登校して、理由を聞いてもはぐらかされて。それでも黙って何もしないでいられるほど僕は冷静でも大人でもない。

入り組んだ住宅街で、道幅が細くなる。車も通れない細い舗装道路を着けて行くと、乗用車が一台停まっていた。車体の色は白。ボンネットが異常に長い。リムジンだ。そのドアが開く。

「…あいつか」

スレインが待ち合わせていた相手は想像と随分違った。同い年か少し上か。秀麗な面持ちでいかにも良家の子息風の容貌。クリーム色のスーツっぽい私服を着用している。彼は穏やかな微笑みを浮かべ、スレインの肩に手を乗せた。

声は聞こえない。数度言葉を交わして、彼らは車に乗り込んだ。回転数の高いエンジン音と共に、高級車はどこに出口があるのかも分からない住宅路を走り去った。

明日、また傷を増やした彼を見る事になるのだろうか。ざわつく胸を一度叩いて、僕は来た道を戻る。

「おはよう、スレイン」
「…お前か。おはよう」
翌朝のバス停。ステップを降りるスレインは見るからに憔悴していた。他の生徒が歩き出すまでスレインは突っ立って蝉の大群を擁する木々を見上げていた。彼はよく立ち止まる。ジージーと降ってくる昆虫の羽音。汗が首を伝った。
うん。言おう。
「あのさ」
「何だ」

スレインが右足を一歩踏み出したので、僕も隣に並んで歩き出す。影の濃い上り坂。校門までが遠いような近いような、不思議な感じだ。

「昨日、追いかけたんだ」

「知ってた」

間髪入れずに返答があった。反射的に顔を見ると、スレインは顎を上げて遠い目をしていた。

気付いていたとは意外だ。急に勢いがしぼんで言葉が出てこなくなる。蝉の出す音の洪水の中、深いため息が彼の口から尾を引いた。

「…お前、もう僕に関わるなよ」

内容とちぐはぐな優しい声だった。

「何で」

「ばれるとまずい」

「誰に？」

「昨日の奴」

あいつ。柔和な笑みを浮かべていた金髪の少年。並んで立った車の前、彼はスレインよりも背が高かった。僕より十センチ以上は高いだろう。

「あの人は、誰？」
昨日から何度も口の中で転がした疑問を吐き出した。一歩。二歩。三歩。四歩を踏み出す手前、スレインは自嘲するように笑った。正直、そんな笑い方は見たくない。
「弟だよ」
気が付くと校門がすぐそこにあった。離れて歩け、と言われておとなしく引き下がるくらい今日の僕は聞きわけがいい。さっきの言葉に頭の中が攪拌されてぐしゃぐしゃだ。内緒で飾り付けたバースデーケーキを逆さに落としてしまったみたいな心地になった。
弟。
そうか。
上履きが窮屈だ。イライラと爪先を打ち付ける。踵はすんなり入ったけれど、一回、二回、三回と床を蹴る。
…あいつは、スレインの家族か。
その日の昼休み、断片的に聞きだした情報は複雑だった。
義理の弟で、年齢はスレインの一つ下。つまり僕と同じ。寄宿学校、ギムナジウムとかいうらし

い。そこで生活している。週に数度会うらしい。だたの兄弟の交流なら微笑ましい限りだが、そうではない。

学校終わりの夕刻から、または休日の朝から、人気のない場所で落ち合い車でホテルに行く。安いラブホテルじゃない。高級で、VIP でないと入れないところ。済んだら自宅から歩くには遠すぎる場所で放り出される。そしてスレインは家まで夜通し歩くのだ。

どんなことをしているのかは分からないけれど、スレインはそれが凄く嫌なのだと、卵焼きを口に入れた時の眉間の皺の数で分かった。

放課後スレインを探していると、屋上へ続く階段に壁に凭れて座り込んでいた。廊下からは死角になる場所で、埃っぽくて薄暗い。ホームルームの後すぐに迎えに行ったんだけど、教室にはいなかった。午後は授業をさぼってここにいたようだ。幸い、朝見た時と服装や傷の数に変化はなかった。何度か呼びかけても反応はない。肩をぽんぽん軽く叩くと、薄ら目が開いた。

「一緒に帰ろうよ」

スレインは目をごしごし擦って両手を突き上げ大きく伸びをした。長いこと眠っていたのだろう。

「もうそんな時間か。…こんなところまで探しに来るとは、お前もまめだな」

階段の三段目で立ち上がるのを踊り場から見上げる。今日も彼の手首には赤い紐の跡があるし、釦のなくなった襟から点々と鬱血が見え隠れする。目は腫れぼったくて、一段一段降りてくる足の動きは緩慢で覚束ない。
「スレイン」
「…何？」
億劫そうなため息と返答。少し先を行くスレインの真横に並び、距離を詰めて強く言う。
「電話番号教えて」
またため息。幸せが逃げるなんてのは迷信だけど、生命力が離散しているように思えて気が気じゃない。
「…昼、僕の話を聞いていなかったのか？」
「聞いた。でも、それを聞いてどうするかは僕が決めるよ」
「…界塚」
ぴたと止まる足。ドスの効いた声。睨み。その背後の高いドアの覗き窓から覗く真っ赤な夕焼け色。
「番号教えて」

僕は繰り返す。馬鹿みたいに同じ言葉を何度でも。押し黙ったまま、目はじっと見据えて。
「迷惑な時間には、絶対かけないから」
長い沈黙。初めて、こんなに長い間彼の目を見た。スレインは率直な眼差しで見つめ返している。瞳の色が変わらない。感情が見えない。透明なままだ。きっと、この目に見られて逸らす人間は多いだろう。悪意ある人間なら尚更。澄み切った水の底のような温度の双眸。
ふう、とため息。今日だけでもう何回目だろう。いつもは数えるんだけど。ごそごその尻ポケットから取り出す端末。操作する人差し指と中指。
「…用もないときに鳴らすなよ」
「ありがとう」
向けられた画面の数字を記憶する。忘れるわけもないが、タッチパネルを操作してすぐに登録する。スレインは、僕が画面をスリープモードにしたことを確認して自分のスマートフォンを仕舞った。
「いつなら、かけていい？」
「いつでもだめだ」
「明日、かけるよ」

また、ため息。でも今度のは軽い感じだ。呆れ半分とも思えるけれど。
「話を聞かない奴だな…」
スレインが小さく首を振って歩き出す。彼の歩調に合わせて、いつもよりのんびり足を動かしていく。斜め後ろ。彼の影の頭を、背中を、肩を腕を踏まないように。
「…早い時間はだめだ」
「朝？」
「夜」
「分かった」
今日はついて来るなって言われない。下駄箱ですぐに靴を履き替えて、スレインが出てくるのをガラス戸の外で待つ。赤すぎる空に蝉の断末魔が木霊して、まるで世界が終わるようだ。

七月Ⅲ　～エスケープⅡ～

授業中にそれに気付いたのは、ポケットに入れておくのを習慣にしたからだ。いつ、何処にいても出られるように。僕は制服の上から振動を続けるスマートフォンと財布を確かめ、体調不良を理由に教室を退出し、切れるな、と念じつつ階段を早足で降りる。一階階段下の物置と化したスペースに身を滑り込ませ、通話ボタンを押した。

「もしもし。スレイン？」

息を呑む音が聞こえた。

『…ああ、……えっと。…出るとは思わなくて。…授業中だろう？』

背後に音はない。どこにいるのだろう。

「まあね。どうしたの？」

『いや、何でもない』

すぐにでも走り出しそうな足を床に縫い留める。何かがあった。授業中だと知りつつ、掛けるなと言いつつ、切羽詰まって僕に電話を掛けてくるくらいの何か。まだ声が聞けるだけいい。その声がいつもとそう変わりないことは、いいのかどうかわからないけれど。

「今どこ？」
『いや、もういい。授業に戻れ。悪かった』
そんなこと、出来るわけないだろう。
「今から会おう。どこにしようか。家に行ったら迷惑？」
長い沈黙があった。本当に、今どこにいるのだろう。これだけ音がしないなら室内かと思ったが、家ではないらしい。
『…じゃあ、〇〇公園で』
今なら次のバスは十二分後。そこから十七分。そこから走ったら十分弱。
「分かった。四十分後には着く」
『…うん』
今走ってもバスが早く来るわけではないが、黙り込んだスマホを握り二段飛ばしで階段を駆け下りる。

「スレイン」
三十六分で着いた。体育祭でもこんなに真剣に走ったことは無い。スレインはベンチに寄りかかって座っていた。目の前で名前を呼ぶとスレインはゆるゆると首を振り、複雑な表情を浮かべた。
「…本当に来るとは思わなかった」
その物言いに腹も立ったが、僕は言い返さなかった。全力疾走して疲れていたし、あと顔を見たら安心した。唾を数度飲み込むと呼吸が落ち着いてきた。
「本気で言ってる？」
しまった、と顔に描いてスレインは弱々しく笑った。口の端が赤い。血が出て拭いた後。
「…嘘。来ると思ってたけど、来ない方がいいと思っていた」
もしかして、こんな姿を見られたくはなかったろうか。よく考えたら、スレインはどこから来たのだろう。この格好で。僕より早く着いていたからと言って近場というわけではないかもしれない。徒歩か車か、バスか電車。平日の午前中にこの姿では変に目立って嫌な思いをしたかもしれない。公園を待ち合わせ場所にしたのは、僕の考えが足りなかった。

「…迷惑だった？」
「いや。嬉しいよ」
今日のスレインは優しい。いや、優しいのはいつもそうだけど、今日は学校よりずっと話す距離が近い。こっちが本来の彼なのかもしれない。
「…あのさ」
「うん」
昼前の公園はこんなに静かだったのか。
「その顔、どうしたの」
遠くで車が一台走り去る音がした。スレインが両目を細めて閉じた唇を曲げた。
「やっと聞いたな」
蝉の声、してたんだ。そんなことに今気づく。ベンチの中央に座る、というよりぐしゃりと潰れるような彼の右側に座る。座面は日に焼けて熱い。
夏のじめりとした空気に、微かに混ざる鉄の臭い。
「この状況で聞かない人はいないと思うよ」
「そっか」

スレインが伸ばした足先に視線を落とし、左右のスニーカーがトントンと爪先をぶつけた。地面の濃い影も一緒に動いてそして止まり、僕はスレインの横顔を見た。二秒後、目が合う。
「…界塚」
「うん」
「どうして、僕に構う？」
もう何度目だろう。…僕がそう思うのも、何度目だろう。同じことを何度も繰り返して、何を確認しているのだろうか。僕らは。
「好きなんだ」
「どうして好きなんだ？」
間髪入れずに鋭い声が返った。見返す蒼白な顔は昼間のの幽霊のようにも見える。目を逸らしたくはないのに、青褪めた肌の色の違う部分につい目がいってしまう。
血の匂い。これはスレインの血の匂い。
「…それは」
頭がぼうっとして、言葉が浮かんでこない。冷汗で夏なのに寒気がする。スレインは左右非対称に顔を歪めて口を開いた。唇は戦慄いている。ひどく怒っているようにも見えるし、何かに怯えて

いるようにも見えた。
「顔か？それとも体？まさか、勝手に想像した性格とか中身とかうすら寒いことは言うなよ」
こんな物言いは初めてだ。邪険にされてはいても、こんな感情のぶつけ方をすることは無かった。
「荒れてるね」
「話を逸らすな」
「スレイン」
その時、表情が消えて瞼が震えた。泣くかと思った。でも頬を濡らすのはこびり付いた血だけで、彼は息を呑みこみ荒々しく首を振った。
「だって、おかしいだろう。こんな、…汚い人間を好きになるやつがいるもんか」
スレインは胸を掴んで苦しそうに呻いた。シャツは汚れている。汗で張り付いた部分の肌の色は生白い。薄い布地に隠された部分と、過ぎた事態。思考が感情を置き去りにして、蝉の声が脳を掻き混ぜる。何か、何かと言葉を探す。情けない。こんな時、何も言えないままなんて。
その時、風が木を揺らし髪が日を透かした。一本一本の髪が奇跡みたいに流れて分かれてまた束になって。それを見ていたら。
「綺麗だよ」

こんなことを言うつもりでは無かったのに。
「馬鹿。どこが。見てみろ」
スレインはそう吐き捨て数個残った釦を外し始めた。縺れる指先に苛々と舌を鳴らして。喉がごく、と唾を通す。ひどい喉の渇きを覚える。釦は全て外れた。露わになった胸と腹に大きく残る青痣と血痕。そして嫌な汚れ。数を数える。そして気付く。それらの下、本来の皮膚の色と異なる部分があることを。
痣と汚れの下には、葦を散らしたような無数の傷があった。数え癖のある僕が数えるのを躊躇するくらいの。
「傷だらけだ。今だって、血が出てる。血だけじゃないけどな。何人分かも分からない体液が、動く度だらだら出てくる。お前、そんなの見たことあるか」
神経に触れる声だ。苦しそうな荒い呼吸。鉄の臭い。汗ではない体液の臭い。生臭い。
「見たことはない」
目の奥がチカチカする。
「見るか？」
頭が自分のものじゃないみたいに真っ白だ。僕を睨む目は乾いているけど半分くらい泣いている。

「見てほしいの？」
視線を受け止めやっとの思いでそう言うと、スレインは糸が切れたように緊張を解き頭を垂れた。今度こそ泣くだろうか、と思ったけれど、二つの碧はラムネのビー玉みたいに透き通って彼の眼窩に収まっていた。
僕は立ち上がる。スレインは身動きしない。
「すぐに戻ってくるから、ここで待っていて。いなくならないでね」
返事はないが、聞こえているだろう。

「お茶とコーヒー、どっちがいい？」
二本の缶を顔の前にぶら下げるとスレインは三度目を瞬き、口を開いた。
「…お前、これを買いに？」

「うん。冷えてるよ」
自動販売機の利点は、温度が一定に保たれていることと店員がいないことだ。今日は特にそう思う。
「…じゃあ、お茶」
「はい」
結露で水滴の滴る缶を手渡す。白い手首に水滴が伝った。隣に座って、プルトップに指を掛ける。
「…それ、無糖だろう？」
怪訝そうな声に指を止める。
「そうだけど」
「お前、苦いの嫌いじゃなかったか」
よく覚えてる。一回しか言ったことないのに。
「スレインは、砂糖もミルクも入れないでしょ？」
何度か見た。一緒に寄り道した自動販売機やコンビニで黒い缶を選ぶの。
「飲めるのか？」
会話が成立するのは嬉しいけれど、子ども扱いされている気もして複雑だ。

「飲める」
プチン、と缶を開けて口をつける。……やっぱり苦い。よくこんなの飲めるな。キンキンに冷えていて良かった。あと、すごく喉が渇いていて。この一回で飲まないともう飲み込めないと悟り、苦すぎる液体を喉の奥に放り込む。
「…変なやつ」
「そうかな」
一気に空にした缶を口から離してスレインを見る。彼は手の中で冷たく濡れた缶をころころ転がしていた。
「…そういう取り決めなんだよ」
教科書を音読するような淡々とした声だった。
「取り決め？」
スレインは缶の蓋を開けた。ごくごくごく、と半分くらい飲んで美味しい、と言った。
「今のお父さん、血がつながっていないんだ」
「お父さんは死んだの？」
あのサンドイッチを作って行った、二人暮らしのお父さん。

「うん。十四の時死んだ。お母さんは僕が赤ん坊のころに家を出て行って、顔も知らない」
「そうなんだ」
十四歳。中学生。
「お前も、両親いないんだろう」
誰の声か、と思うくらい穏やかで静かな声だった。
「なんで知ってるの？」
スレインはちらりと僕を見た。
「弁当の話をしたから」
「そうだっけ」
よく覚えている。本当に。いつも邪魔くさそうに、面倒そうにして何を言っても生返事で。何を言っても怒ってばかりだし。嫌われてるんじゃないか、とは前向き思考の僕でさえ時々胸を翳めるところなのに。ちゃんと話を聞いてくれて、そうして覚えてくれている。そう。そういうところも、好きになった。
「…僕の部屋は鍵がないんだ」
嫌な予感がした。

「うん」
夏の暴力的な陽射しが地面を白く焼く。ざわめく影から足先だけを出してスレインは続けた。
「僕は、家に帰ったら風呂に入って部屋に行く」
「ご飯は？」
「夜は食べない。…具合が悪いんだと」
真夏なのに寒気がした。だからこんなに細いんだ。
「一週間に三回くらい、あの人が来る。ええと、今のお父さん」
「三回」
「大体だけど。来ない時もあるし、毎日の時もある。来ない日は、順番でも決まってるのかな。何人も時間をずらして来るんだ。執事とか、庭師とか、コックとか。食客とかいう訳の分からない肩書の変態とか。こっちは寝てるっていうのに」
それは家と呼べるのだろうか。
「…週に一度、あいつに呼び出される」
あいつっていうのは、あの。金髪で青い目の。全然似ていない。
「弟？」

「義理のな」
スレインが缶を持っていない左の手首の内側を見た。痕がある。ぐるりと取り囲む蛇のような輪が幾重にも。よく見たら首にもあった。こちらは薄く、光の加減でたまたま見えた。一体何があったのだろう。聞くのも怖い。
「体のいいダッチワイフさ。もう慣れたと思っていたんだけど、今日はあいつの遊びが久々に酷くて」
遊び。
「ごめんな」
茹だった頭でマイナス思考に陥っていると、スレインがそう言った。何のことか分からず聞き返す。
「何が？」
スレインが声を出さず、口の端で笑った。この状況で笑えるのは見ていて辛い。
「お前みたいないい奴がさ。…まあ、ちょっと変わってるけど。…どうしてこんな屑に付き合うのか気が知れないよ」
ベンチに落ちる木の葉の影が揺れた。透ける光の点描がちらちら地面でダンスする。土砂降りの

蝉の声は少し怖い。
光と影を無防備に受ける白い横顔を見る。綺麗だと思う。
スレインは屑じゃないし、優しいと思うけれど。
「明日は学校に来る？」
スレインは残ったお茶を飲み干す。汗をかいた缶を傾けると水滴が地面にぽたぽたと落ちた。
湿った土は、夏の太陽に焼かれてすぐ乾く。
ひゅん、と空き缶が放物線を描いて飛んで行く。伸びた腕。青空をバックにくるくる回るアルミ缶。それは硬質な音を立てて屑籠に吸い込まれた。
「行くよ」
はっきりした声だった。
「お弁当作るよ」
スレインが頷く。
「うん」
痛々しい顔。痛々しい笑み。僕の為だけの笑顔。
ああ、蝉も太陽も影さえも煩い。

秋

九月　～お月見～

深夜の住宅街に軽快な電子音。発信者を確認して、通話ボタンを押す。
「…もしもし？界塚？」
『やあ、今どこ？』
周囲を見回す。目印になるようなものは見当たらなかった。
「えっと…道」
「…家じゃないの？」
頭脳明晰な後輩にしては珍しく、返答に間があった。ばれたか。まあ、あいつに隠し事をできた試しはないし。いいか。
「色々あって」
「帰り道？」
遮断機の前で立ち止まる。踏切が鳴った。赤いライトの点滅から目を逸らす。煩くて、気色悪い。

暗い静かな場所に行きたい。
カンカンカンカンカン。
目と鼻の先の時速八十キロメートル。誰もいない回送列車の窓の中。
轟轟と音を立てる電車を見送る。引き寄せられるままに足を進めることができたら、楽なんだろう。
「どこか分かった。その先の公園で待ってて」
スマートフォンのスピーカーから、界塚の声。
喧噪の過ぎ去った線路を横断する。公園は次の曲がり角。
「…何で？お前の家、この近くか？」
「お月見しよう」
プツリと切れた通話。スレインは端末の画面を一度見てポケットに入れた。

「やあ」
公園のベンチで目を閉じていると、軽い声が降ってきた。目を開ける。界塚伊奈帆がそこにいた。
「お前…その格好」
グレーのスウェットの上下はどう見ても寝間着だろう。右手にビニール袋をぶら下げている。
「部屋着だよ」
そっけない返事。界塚は音もなくすっと隣に座った。こいつは、いつもこう。人の話を聞いているようで聞いていない。聞いていないようで聞いている。
要するに、マイペースなのか。腹の立つことも多いけれど、今はそれがちょうどいい。
「何で来たんだ？」
喉が粘ついて、変な声が出てしまった。界塚はいつもの顔で僕を見る。口は自然に閉じられて、目は静かに澄んで。押し付けがましくない空気。こういうところは、嫌いじゃない。こんな時間にこんな格好で、こんな様相の人間がいたら、普通色々聞くだろうから。
「だから、お月見だよ」
「物好きな奴だな」

多分風呂も入った寝間着姿で、ここは住まいの近所でもない。顔を合わせた時の呼吸の感じから、走ってきたのが分かった。

「はい、これ」

界塚がガサゴソとビニール袋から何かを取り出した。手の中に押し込められた柔らかい感触は何年ぶりだろう。

「…饅頭？」

「コンビニ寄ったんだけど、お団子がなくてさ」

月見団子か。情緒に欠けるように見えて、意外と形から入るタイプだ。こいつは食い意地が張っているから、食べ物に関してだけかもしれないが。

「…ありがとう」

「あとこれ」

続けて手渡されたのは缶のお茶。反対側の手の中も同じデザイン。今日は界塚もお茶だった。

「用意がいいな」

「でしょ」

パリ、と包装紙を剥がし饅頭を口に入れる。口の中は鉄臭いけれど、餡の甘さはちゃんと感じる。

飲み込んで腹の中に入ると空腹を覚えた。身体の内側がじんわり温かくなる。
「美味しいね」
界塚の呑気な声。
「うん」
夜の公園で、二人並んで饅頭を食べる。悪くない。静かだし。誰もいないし。それにそう、月が綺麗だ。まん丸で黄色くて。
口の中が切れて噛みにくいが、全部味わって食べることができた。缶に口をつけて、温かいお茶を飲む。空腹が満たされて体中がほぐれ、次は眠気がやってきた。
「月が綺麗だよ」
うとうとしていた。界塚の声で目を擦る。言葉につられて夜空を見ると、丸い。うん。丸い。月ってこんなに丸かったっけ。そもそも、月を見たのなんていつぶりだっけ。
「うん」
月の光ってこんなに優しいんだ。
「また、二人でお月見しよう」
不思議なやつ。変なやつ。物好きなやつ。どうして僕なんかにつき纏うのかは分からないけれど、

今それはいいか。静かで綺麗な夜だ。月見って、案外楽しいものだな。
「また、饅頭食べるのか？」
界塚は顎に手を当てた。
「今度はお団子かな」

十月Ⅰ　～しょっぱい味～

バケツをひっくり返したような雨。ざんざか降る雨は、いつもなら鬱陶しいと思う所だけれど今日に限っては違う。雨も案外便利なものだ。少々の汚れはシャワーみたいに洗い流してくれるし、小さな声や音は聞こえないし。
頬に伝っているのが雨なのか涙なのさえ分からないんだから。

「…スレイン」

雨の体育館裏っていうのは、こんなに静かなものかな。時間のせいか。雨音のせいか。さっきまでの出来事のせいか。しかし、何もこんなところに放り出して行くことないだろう。人間一人。

六限目が開始して四十分。僕の座席は窓際の前から二番目。三階の教室。体育館と渡り廊下の屋根と排水溝が地上の光景。数学の授業は、教科書を見れば分かる内容をくどいほど丁寧に説明していて、真面目な振りにも飽きて今日の夕飯は何にしようか、と考え窓の外を見た。まず上を見た。灰色の空。次に下。体育館の壁より扉より先に目に入った渡り廊下。

数人の生徒が渡り廊下に走り込んだ。ただの胸騒ぎ。論理的ではない。主観で直感。でも、僕はそいつらの走り方がいつか図書室で見た連中と似ている、と感じた。だから授業を放り出して、靴音が反響する廊下を音を殺して走った。

六限目終了まで四分。壁に背を預けてぐっしょり濡れた体。斜め前にしゃがんで名前を呼ぶことしかできない僕。いつも何もできない。いつも、何も言えない。

雨の色に染まる髪。肌。…瞳。濡れている。でも、さっきも思ったことだけれど、これが雨なのか涙なのかは僕には分かりはしないんだ。

ふと手を伸ばす。濡れた頬。冷たい。

「…触るな」
押し殺した声。
「…どうして？」
「…汚れる。お前が」
僕の手を濡らすのは雨なのかな。それとも涙かな。
「…どこも汚れてないよ」
ぱしん、と音を立て平手が僕の手を払った。
「消えろ。もう僕の前に現れるな」
チャイム。
キーンコーンカーンコーン、
キーンコーンカーンコーン。
余韻。
雨。
雨の音。
雨が僕らを濡らす音。

「それが本音なら」
僕にだって、怖いものくらいあるんだ。何でも出来るわけじゃないし、苦手な勉強だってある。上手く言葉が出てこないなんてしょっちゅうで、本当に言いたいことを言葉にするのが凄く遅い。傷つくことだって、落ち込むことだってある。だからこんな時、声が震えたりもする。喉の奥が痛い。歯がゆくて悔しくてどうしようもなくて、声が。
雨で震えは誤魔化せるだろうか。
「もう金輪際、君の前に現れない」
沈黙。そして匂い。
雨の匂い。
スレインが眉尻を下げて笑う。僕はそれがまたショックで、ぐ、と喉の奥に力を入れる。雨だから、泣いたって分かりはしないのに。泣けばいいかな、とも思うんだけど。なんかそれは違う気がして。だってさ。僕が泣いたら、スレインはきっと泣けないだろうから。
「でもそれ、嘘でしょ？本当じゃないよね」
見開く目。済んだ色。透明な感情。こんな静かな場所を心の中に持っている。誰にも触れない場所がある。

困らせてばかりでごめん。でも、分かって欲しい。
好き。大好き。一緒にいたい。
笑ってほしい。
それだけなんだ。
校舎の喧噪を別の宇宙の出来事みたいに遠く感じる。ばたばたと無数の上靴が廊下を行き交う振動を雨が遠く運ぶ。
スレインが僕の濡れた髪をぐしゃぐしゃ乱暴に撫でた。
「…お前、頭はいいけど馬鹿だろう」
さっき触った冷たい頬に笑窪ができた。濡れた白い肌に顔を近づける。逃げない。目を見てる。瞳も濡れてる。睫毛も。白目は少し充血してて。
笑窪の場所は、しょっぱい味がした。

十月Ⅱ　～秋の花火～

「はい」

差し出された棒を素直に手に取ったのは多分、夜だったからだ。

公園の隅っこ。肌寒い。この公園でこいつと過ごすのは、これで三回目。今日と、月見と、もっと前に一回。

こいつ、あのこと覚えてるのかな。

「したことある？花火」

シュ、とマッチを擦る音。その炎に棒の先端を持っていく。触れた瞬間、火花が美しい音と色を奏で出した。懐かしい。

「…小さい頃に」

「僕は、去年もした」

界塚はマッチを擦り、化学反応を起こす光を生成する。人工的に作り出された、娯楽の為だけの

光はそれなりに綺麗だと思う。
しばらく花火の音だけが公園に響いた。パチパチと火花が散って、火が消える瞬間はすごく静かだ。光が無くなると暗闇に飲み込まれるようで怖くて、次々花火を取り出し、火をつける。今この光の中が届く間だけ、世界が消えて二人きりになった気がした。
「…界塚」

スレインが僕の名前を呼んだ。
赤と緑と、黄色の光。それを浴びる横顔を眺める。骨の形と肌の曲線。眼球を半ば塞ぐ瞼の形。睫毛の落とす影。髪の照り返し。化学反応の色に染まる造形が綺麗すぎて、人ではないように見えるくらい。でも僕は、その綺麗な顔がおっかなく怒るところも、間抜けに口を開けるところも、歯を食いしばって涙をこらえる所も、それに、美味しいって言う笑顔だって知っている。

「何？」
「どうして、僕に構う？」
何度も繰り返し聞かれた言葉ではあったし、彼の中では自問の続いた問いかけだった。答えを探して僕はスレインの顔を見つめた。
目が合うかな。
…。
…。
…。
…あ、合った。
「僕、スレインが好きなんだ」
棒の中ほどまで進んだ花火を手に持ったまま、僕は意味もなく立ち上がる。無駄な動作。多分照れてるんだ。僕は。
「なんで？」
「好きになるのに、理由なんてないよ」
スレインは俯いて、僕からはどんな顔をしているのか見えなくなった。手元の花火の炎が徐々に

小さくなる。
「どこが好きなんだ？…僕なんかの」
ジュ、と悲鳴を上げてスレインの手の中の火は消えた。僕は新しい棒を二本取り出し、もう一方の手に持った光の放射から熱源を移す。よし、点いた。直線的な白い光を両手に持って後ろ足で数歩下がる。
「スレイン、こっち向いて」
スレインが顔を上げた。手持ち花火で宙で動かす。炎の残像はすぐに消えてしまうけれど、何がしたいのかは分かってくれたらしい。スレインの視線は光の先を追い掛けた。

花火で夜空に書いたひらがな二文字。

スレインは笑った。僕も笑う。
「そう。そういう所」
気恥ずかしくて、そっぽを向いて無関係な図形を描いてみる。丸。三角。四角。
「…本当、変なやつ」

新しい花火を取り出して、ん、と右手の花火を差し出した。スレインは苦笑いでそれを受け取った。

「はい、消える前に火もらって」

「…ああ」

パチパチ。パチパチ。火花が夜に溶けていく。

冬

十一月　〜ホッカイロ〜

校門で鉢合わせたのはどうしてだ。バスの時間は違うはずだし同じバスにはいなかった、と思う。いたらこいつから声を掛けるだろう。それに、歩いて来た方向は真逆だ。先に口を開いたのは寒さで耳を赤くした目の前の後輩。

「信じられない」

挨拶もなく、どんぐりのように目を見開いての開口一番がそれ。

「よく平気だね」

何の事だか分からない。信じられないって、何が？

「ねぇ、寒くないの？」

それでようやく、気温にそぐわぬ僕の服装を検めての言葉だと気付いた。

「…別に」

もう一度「信じられない」と繰り返して彼は首を振った。相手をしても仕方がないので、僕は校

舎に向かって歩き出す。
「この寒いのに、マフラーも手袋も、セーターもなし？」
界塚が言いながら隣に並ぶ。まだその話を続けるのか。こいつの話は案外しつこい。
「…まだ十月だろ」
「すぐ十一月だよ」
見ているだけで寒い、と言った口とその服装を横目で見てみる。
清潔なジャケットの下は学校指定のセーター。ネクタイは見えない。毛糸の網目の大きいオレンジ色のマフラーがぐるぐる巻きに首周りを覆っているから。それと手袋か。見えない所に色々着こんでいるかもしれない。これで耳当てでもつけようものなら、スキー場どころかアラスカにいたって平気なんじゃないか。
学校の制服姿でオーロラを眺めるしょうもない想像をしてしまったのは、寝ぼけているか頭がまだ寝ているせいか。
「うわ！何？」
だからぐい、と手を握られ引かれて反応できずによろけてしまった。
「見てるだけで寒いから」

そして今の状況はと言えば、僕の左手は界塚の制服のジャケット右ポケットの中に強引に押し込められている。登校した生徒が吸い込まれる朝の昇降口の手前で。

怒りたいし怒鳴りたいが、そんなのが堪えるやつじゃない。それに。

冷えた鼻からため息が長く漏れる。

「…こんなに寒がりなやつ、初めて見た」

「あったかいでしょ？」

そんなうきうきした顔で見返されたら、怒るわけにもいかないし。

十二月　〜モーニングコール〜

「昨日、コーヒーショップで君を見たよ。スレイン」

今日一日顔を見ないと思ったら、下校のために靴を履いた瞬間、界塚伊奈帆が現れた。挨拶もなくそれ。静かで、聞く人によっては落ち込んだとも取れる声の調子だった。
「そうか」
沈んだ声の原因を察して、面倒くさいが、返事をしてやる。きっと、どう話題を切り出すか考えあぐねて、今になったのだと思うから。
「あの人は、恋人？」
「まさか」
界塚の言う人物の顔が記憶も新しく鮮やかに脳裏に浮かびそれを掻き消す。清らかな明るい笑顔。花を渡る蝶のような軽やかな声。同じ空気を吸うことすら今では畏れ多い。界塚伊奈帆の持つ僕に対する感情の一端が見る目に色をつけたとしても、恋人同士に見えたのなら注意が必要だ。どこで誰が見ているかは分からない。嬉しい、という気持ちも少しあるけれど。
「楽しそうに見えたけど」
「そりゃ、楽しいさ。僕は…」
慌てて首を振った。いけない。これ以上はぼろが出そうだ。話題を変えることにする。
「まさか、妬いてるのか？」

「そう」
…素直なやつ。俯き加減の顔としょげ返った声音にどう答えたものか。
秋空の沈む日が歩く僕らを赤くする。夕日が眩しいと思うようになったのはいつからだっけ。早く夜になってしまえと投げやりに眺めるようになったのは。
「ただの幼馴染だ。それに、あの方は許婚がいる」
幸福を約束された絵画のような立ち姿。綺麗で、豊かで、染み一つない完璧な二人がそこにいる。汚れや過ちは許されない真っ白な世界。
「でも、好きなんでしょ」
今日の界塚は隣に並ばず少し後ろについてきた。
「…まあな。でも多分、お前の言う好きとは違う」
夕焼けの終わり、紫色に滲んだ空。水を混ぜ過ぎた水彩絵の具のような頼りない雲ととても小さい月の白。
白い頬がばら色に染まり、瞳が宝石のようにきらきら輝く。もう何年も前、図鑑や絵本を見て、御伽噺のような美しい話をした。取り留めもなく。真実でもなかった。それでもあの人は本当に嬉しそうに、幸せそうに僕の名前を呼んで。昨日だって。年にそぐわない子どものような話をして。

あの笑顔。小さな時から、変わらない。
僕はこんなに汚れてしまったのに。
「僕は…会った後に。もうこれが最後であってほしいと思うんだ」

❄

スレインの少し後ろを歩くのは、僕の顔を見られたくないからだ。きっと弱々しい、嫌な顔をしていると思う。早く日が落ちて暗くなればいいのに。そうしたら、どんな顔をしているかなんて見えないから。
隣に並ぶことが多くなっていたから、スレインの背中を見るのは久しぶりだ。制服越しにも硬く薄い背中と重さのないような華奢な肩がそこにある。この背中に翼があっても僕は驚かないだろう。羽ばたき一つでいなくなってしまうような、軽やかな背中だった。
「…僕は、好きな人には毎日会いたい」

さっきの言葉に納得ができなくて、何か言おうと言葉を探したけれどそんなのしか出てこない。だって本当のことだし。これが最後なんて絶対に嫌だ。まだいっぱいある。話したいことも、聞きたいことも、見たい顔も、知りたいことも。一緒に行きたい場所も見たいものも。死ぬまでに全部できないんじゃないかって思えるくらいの数え切れない明日が、スレインといると次々浮かんで僕の頭のノートに書き留められる。

「だから言ったろ。お前とは違うって」

本当に今いなくなって明日は会えなくなるような気がして、僕は走ってスレインの隣に並んだ。横顔を見上げる。視線が合った。夕日に照らされた静かな目。

今、死にたいって。そう思ってるんじゃないだろうか。

「明日は、朝一番におはようを言うよ。バス停で、君が降りてくるのを待ってる。お昼には、お弁当を持って教室まで迎えに行く。それで、一緒に帰ろうよ。寄り道してさ」

考えるより先に、ポップコーンのように言葉が口から飛び出した。自分でも驚いて、言い切った後にぽかんと口を開けたまま足が止まった。

スレインは俯いて笑った。足を止め、僕の隣に立ったまま。

「回りくどいやつ」

しかめっ面の笑顔で、乾いた声で溜め息吐いて。
「伝わった？」
さあ、と気のない返事と裏腹に、彼は僕の足が動くのを待って自分の右足を前に進めた。
「あんまり早くは駄目だ。電話」
ゴーサイン。さっきまでの憂鬱が嘘のように心臓が弾んだ。
「五時は早い？」
「…早すぎ」
帰り道。下り坂の長い影法師を踏んで歩く。

一月　〜おうちごはん〜

まさか今日、こんなところで会うとは思わなかった。

「…軽蔑するか？」

夕方六時の路地裏。ゴミバケツがあって、突き当りに塀があって、左右の壁の扉は開くことを忘れたみたいに同化して。今時、こんなステレオタイプの掃き溜めが実在するとは思わなかった。

「…じゃあ、同情？」

夕飯の買い出しにスーパーに行った。その帰り道、ふと手が無音のスマートフォンに伸びた。両手のずっしり重いエコバッグを、片手にわざわざ持ち代えて。予感ではない。確信でもない。ただ、何も考えずに電話を掛けた。

するとベルの音が、右手の壁と壁の間から聞こえた。

「怒ってもいい。…殴っても」

音に近づくと、変な臭いがして。

「…それか、笑うか？」
音はどんどん大きくなって。
壁と壁の幅はどんどん狭まって。空はどんどん遠くなって。視界はどんどん暗くなって。
その袋小路にスレインがいた。
「…お前、今日は静かだな」
倒れている、というより、放り投げられた、という身体。
「…界塚？」
綿や目の飛んだ縫いぐるみ。糸の切れたマリオネット。手足の捩げた蝋人形。そういうものを連想した。
捨てられた人形。
誰が捨てた？
誰が？
スレインの顔の近くに両膝をついた。視界が滲んで頭が痛い。
やばい。泣きそう。スレインの前で泣いたことはないのに。
「…おい、界塚？」

スレインの声。戸惑った感じの、心配そうな声。悪いけど、今返事できない。尻もちをついて体育座りで膝の間に顔を突っ込む。じっと息を殺して、この感情の大きさをやり過ごそうとする。身動きできない僕のすぐそこで、スレインが身動ぎした。そして。

「……い、伊奈帆？」

だめだ、泣く。

涙って痛い。目が痛い。喉が痛い。胸が痛い。

この人は馬鹿だ。馬鹿で正直で明け透けで、そしてとても優しい。こんなに傷だらけなのに。

「…何か、食べて帰ろうよ」

涙が出尽くし、探して探してようやく見つかった言葉がそれ。スレインが頬を地面に縫い留められたまま笑った。

「いいな。奢り？」

「うん」

人の心配ばかり。僕の心配ばっかり。

でも。

「…うちにおいでよ」

スレインが一度じいっと僕を見て、困った顔で笑った。
「…何、手料理？」
違う、って言いたかった、でも言葉にならなかった。逃げて来い。こっちに来て。傍にいる。一緒にいる。それで———。
首を振る。縦に。
守るなんて。守れるなんて言えない。だって何の力もない。今の僕には。学校の休み時間に一緒にいて、下校の途中に寄り道して。ちょっと遠くへ一緒に出かけて。たまに一緒にお月見して。一緒にご飯を食べるだけ。いつだってスレインは家に帰るんだ。僕の家はスレインの家じゃない。スレインの家族は、僕の家族じゃない。スレインと僕は、家族ではない。子どもと子どもで、自由にできることなんてなくて。どうしてだろう。助けられないのは。救えないのは。悔しくて歯痒くて情けなくて、また目が熱くなった。
「出汁巻き卵と、…味噌汁。あと、唐揚げ」
唐揚げ、と嬉しそうに笑って、彼は体を起こした。肩を支えて手を握る。冷えた細い指。
早く大人になりたい。この人を連れて行けるくらい。

ぼろぼろのスレインを後ろに連れて、玄関の扉を開けた。暗い室内。寒い空気。まず電灯のスイッチを押した。

「お風呂入る？」

スレインは首を回して室内を見渡している。他人の家が物珍しいのかもしれない。

「いいのか？」

「うん」

改めて、明るい光の中で彼の惨状を認識する。汚れた制服。飛んでなくなったボタン。裂けた布地。赤と白の体液が乾いてこびりついた痣だらけの肌。泥に塗れた髪。とにかく酷い恰好。

「制服、どうする？」

「…ああ、どうしようかな」

スレインは自分の体を見渡して、思い切り顔を顰めた。無言で、手首のあたりをじっと見ている。

❄

ボタンがなくて、がばがばの袖口から赤く腫れた手首が見えた。でも手当てするにも、まず洗わないと。

「お湯張ってくるよ。座ってて」

ソファを勧めるが、スレインは首を振った。

「いい。…汚すから」

考えなしなことを言った、と自分の発言を詰る。

「…すぐだから」

「ありがとう」

風呂桶に栓をして、思い切り蛇口を捻る。バシャバシャ、ごうごうと煩い水音と飛沫をじっと見る。深く大きく息を吐く。

そうしないと、叫び出しそうだ。

リビングに戻ると、スレインがテレビの近くに立っていた。電話機の乗った低い棚の上。ユキ姉の置いた写真立てが幾つか。

「お前、家族は？」

「姉さん一人」
「親は？」
「死んだ」
「そうか」
スレインは、今度は窓に近づいた。外はもう暗い。ガラスには、外の風景ではなく自分の顔が映っているだろう。鏡を見る代わりかもしれない。あんまり自分で見てほしくないな。傷だらけで、酷い顔だから。
「今日、お姉さんは？」
また質問。いつもとあべこべになったみたいだ。今日のスレインは話してばかりで、僕はそれに答えてばかり。
「遅くなるって。十一時くらいかな」
「そう」
「…泊まっていく？」
「いや、帰る」
予想通りの即答。でも。帰ったらまた。

「うちなら、気にしないよ。ユキ姉は大雑把だから」
余計な一言だし、嫌われたと思った。少し早口の僕の失言に、スレインは振り向いた。穏やかな表情で、血色のない唇が薄く開く。
「ユキって言うんだ、お姉さん」
「あ、うん」
そうか。言ったことなかったっけ。
「お前は、いなほで」
いきなり名前を呼ばれるとこそばゆい。いつも苗字呼びだし。
「お姉さんの名前がゆき」
こんな喋り方をする人だったかな。滔々と流れる声は円やかで柔らかい。
「うん…何？」
何だろう。落ち着かない。学校とは全然違う。こんなスレインは初めてだ。でも、思い返すと片鱗はあったかもしれない。公園や海、丘の上で見た表情と声。いつも僕がたくさん喋って、スレインはそれを聞いて返事をして。返事をしない時もあったけど、学校の外で過ごす時は時々笑っていた。僕はすぐに消えてしまうそれを一生懸命目に焼き付けようとするのだけれど、見蕩れてしまっ

ていつも後からはっとする。
「いや。いい名前だと思っただけ」
そんなことを言われたのは初めてだ。僕の名前。最初は覚える気なんかないと思って色々考えた。辞書を忘れたふりをして借りに行って、こっそり僕のと交換してみたり。そこにメモを挟んだり。気付いたはずだ。でも何も言わずにまた交換して。
ちゃんと名前も覚えてくれて、いい名前だと言ってくれた。
「…そうかな」
「綺麗な風景だ。雪が降り、稲穂が揺れる」
スレインが僕を見て笑った。どきりとする。穏やかで、優しくて、澄んだ空の向こうのような笑顔。
初めて見た。こんな顔もするんだ。見惚れていると、スレインがゆっくり左右に首を振った。
「外泊は駄目なんだ。誘ってくれてありがとう」
「そう」
困ったように眉を下げて言う彼を見ると、断られたのに暗い気持ちは吹き飛んでいた。

❄

ポン。

丁度フライパンの上で出し巻き卵が一回転に成功した時、スレインがほかほかあったかそうな様子でリビングに戻ってきた。

「いい匂い」

そう言って既にダイニングテーブルに並んだ献立を眺め出した。和やかな表情。

「気分はどう？」

「いい気分」

他に聞き方もあったと思うけど、スレインは顔を向けて返事をしてくれた。照れくささそうに笑ってる。グレーのスウェットの丈が足りてないのは腹立たしいが、それはまあいいか。僕だって、まだまだ伸びる予定だし。

「料理は、いつもお前がするのか？」

「まあね」

もう一度ポン、とフライパンの柄を叩く。てこの原理で黄色が裏返る。おお、と感心したような声が聞こえた。出来上がり。俎板に乗せて粗熱を取る間にフライパンを水に晒してさっと洗う。

「今日は、よく喋るね。スレイン」

言った後で変な意味に取られはしないかと不安になったけど、スレインはにかっと歯を見せて笑った。

「他人に聞かれる心配がないからな」

ザ――――――……。

水音。ああ、出しっぱなしだった。蛇口を閉めて洗い籠から包丁を抜き取り布巾で拭く。形が崩れないように丁寧に刃を出汁巻き卵に差し入れる。

トン。トン。トン。トン。トン。トン。

「…やっぱり、泊まっていったら？」

最後のメニューをテーブルに置いて提案すると、スレインはまた笑った。首は縦ではなく横に動いて。

「大丈　夫」

椅子を引く。見るとまた歯を見せて笑った。口の端にまた血が滲んでいる。

「そう」
全然大丈夫じゃないのに。嘘つき。

「いただきます」
「いただきます」
箸を持つ。茶碗を持ち上げる。一口。噛む音。目が僕を見て、瞼が見開いて、次に飲み込む音。口が開いて。
「美味しい」
こんな一言が、こんなに嬉しいなんて。魔法みたいだ。
「でしょ」
それからしばらく、何も言わず黙々と食べた。僕は時々向かいを盗み見る。姿勢よく座って、綺麗な手の形と箸の動き。伏せた目。お腹が空いているはずなのに、丁寧で急がない。何度も噛んで、お腹に入れる。隣でお弁当を食べたり、パンやお菓子を食べたことはあるけれど、こんなに綺麗に物を食べる人だとは知らなかった。
「…お前さ」

全ての食器の内容物が半分ほどになった頃、スレインが言葉を発するために口を開いた。
「何？」
もの言いたげに瞳が揺れる。今では他の何にも似ていないと思う碧。海よりも、空よりも、星よりも、ずっとずっと好きな色。その色とこんなに長い時間、見つめ合うのは初めてだ。
「…いや、いい」
そう言って閉じた瞼は白くて、静脈の筋がいくつか見えるくらいだった。スレインは箸を伸ばして大皿の唐揚げを手に持った小皿に乗せた。
「スレインは、料理とかする？」
一度開いた口を閉じ、箸に挟んだ肉を小皿に戻してスレインは首を振った。
「上手くない。作れるのは、トーストと、焦げた目玉焼きと、あと」
ジャムサンドくらい。
最後の料理は思った通りで、僕は少し長い瞬きでパッと色彩も鮮やかに浮かんだ記憶を名残惜しく引き留める。白、赤、黄色の縞模様。口に含んだ甘苦い砂糖漬けのオレンジの皮。
「イチゴジャムが好きでしょ？」
食べてるときに聞くのはマナー違反だったかな。スレインが頬張った唐揚げを噛んで飲み込むま

での間、僕が作ったものが彼の身体に消化されるサイクルを想像した。吸収した栄養は血となり、肉となり、彼の身体を構成する一部分となる。

「…え？うん。何で分かった？」

「何となく」

あ、と何かに気付くように口を開けた。「あの時あったね」って、言っても良かったんだけど。でもやめた。スレインは困ったように笑ったから。

だから、僕も何も言わずに笑った。美味しいものをたくさん食べて、明日元気になればいいなと思って。

二月　～天体観測～

いつも手ぶらに近い軽装だけれど、今日のスレインはリュックを肩から提げていた。色は黒っぽい。そこから取り出したものはごつごつとした双眼鏡。意外なような、この上なくらしいような。彼の手の中に収まるそれは、不思議と懐かしい感じがした。

「小さい頃は、これでよく星を見た」

真冬の天体観測なんて、スレインとでなければ絶対にしない。暗いし寒いし。そう、何より寒すぎる。いつもの通り僕から言い出したことではあるけれど。暗くて見えないがスレインの声の色は白い。

「…久しぶりだよ。荷物の中から引っ張り出してきた」

「荷物？」

「昔の荷物。ボストンバッグやトランクの中を引っ掻き回してさ」

引っ越してから数年が経つというのに、部屋の隅に追いやられ荷ほどきされず眠っていた鞄。自由になることのほとんどない生活の中で、思い出の拠り所を頑なに守ってきたのかもしれない。

「…お父さんがくれたんだ」

同じ季節の寒い場所を思い出した。ブランコの木と金属の冷たさ。

小さい頃、彼がサンドイッチを作ってあげた父親。二年前に死んだと聞いた。

「…お父さんと一緒に、星を見た？」
スレインが膝の上の双眼鏡を縦に横にと動かしている。何を確かめているのかな。河川敷の地面は固い。黒々とした川の水は流れも分からない。
「いや。お父さんとは、沼地や海に出かけて水鳥を見た」
夜の海で見たら、星空はどんなだろう。綺麗かな。怖いかな。
「夜、お父さんはいないから。いつも一人で星を見ていた」
バイバイ、って言って別れた後。あの夜も星を見たのだろうか。僕は見なかった。僕を待っていたユキ姉と遅いご飯を食べて、手を握ってもらって寝た。ママレードジャムと冷たい食パンの感触を思い出して。
「ほら。貸してやる」
腕をまっすぐに伸ばした先、僕の鼻先に突き出された双眼鏡。
「え？いいの？」
うん、とスレインが声を出して頷いた。
「乗せ賃代わり。自転車の」
二人乗りも、もう何回目だったっけ。数えてないな。変なの。

受け取ったら重くて、触ると傷や擦れがあるのが分かった。紐は端が擦り切れている。両手でしっかり持って、二つの覗き穴を目に当てる。

空。

星。

星。星。星。

…これは、数え切れない。星の海だ。天地が逆さになったような不思議な感覚に包まれる。

「綺麗だよ」

「そう、綺麗なんだ」

スレインが寝転んだ。その顔の隣に照準を合わせて僕も寝転ぶ。互い違いの僕と君。

「あのさ」

逆さの君が僕を見た。

「好きです」

僕が言うと君は笑う。あの時のような屈託のない笑顔で。

「お前それ」

閉じた口を引っ張って含み笑い。僕も笑う。同時に頷きそして言う。

「「何回目？」」
二人分の笑い声は星まで届かず大気の途中で消えてしまう。それでもいい。

三月Ⅰ　～空に近い場所で～

高い場所ほど、風は冷たく澄んでいる。
「好きです」
フェンスを通り抜ける風の音。
「好きです」
青いばかりの空の色。
「好きです」

小さな小さな、真昼の月。
「好きです。スレイン」
繰り返される四文字。最後にくっついた、耳に馴染んだ四文字。
「…だから？」
問い返す。その橙に。真っ直ぐ過ぎる瞳の力に。
赤い星のように双眸が瞬いた。
「僕を、好きになってみませんか？」
僕は界塚伊奈帆の顔を見る。
不愛想。仏頂面。朴念仁。でも、こんなに分かりやすいやつもいない。だって、目を見れば分かる。いつも僕に向けられた彼の目は、言葉よりも雄弁に心を乗せた。
耳が赤い。引き結んだ唇が時々震えて。目は、じっとこちらを見つめている。逸らしそうになるのを、必死で堪えて。
橙の色。炎のようにも見え、夕焼けのようにも見え、色を名に乗せる果実のようにも見えた。
「…一つ、聞いてもいいか？」
「…何？」

風の道。冷たい風に髪が踊り体が濯がれる。それにしても屋上で告白なんて、定石通りで笑える。こんな当たり前の青春みたいなことの当事者になるなんて。

背後のフェンスに凭れる。ガシャリ、と金属が擦れ響く音。何度も何度も。…何度もこの耳で聞いた。こいつじゃない、別の人間たちと。嫌な音だと思っていた。でも、今の音は嫌いじゃない。いつ死んでもいいと思っていた。自分で死ぬのは面倒だ。誰か、何か、殺してくれと。それが生きる切り札だった。でも。今なら死んでもいいって言われても、待ってくれ、って言う。

「…好きが、満タンになったのか？」

あの日の夕日と上履きの音。廊下に伸びたお前の影。途中なので分かりません、なんて。なんて分かりやすい嘘だろう。そして今なら、こいつは何と言うだろう。

伊奈帆は笑った。はにかんだように。どこか悔しそうに。少しだけ痛そうに。そして歯を見せて。

「ずっと前に」

✧

伊奈帆は目を閉じた。風は冷たく。空は高く。屋上に二人だけ。この場所は、ぼくらの世界で空に一番近い場所。

一日に四十五分間。全部合わせても過ごした時間は一週間に全然足りない。この場所に在った僕らの時間。それでも、他の全部を合わせたよりもずっとずっと多い。帰り道やバス停。映画館。僕の家。河原。コンビニ。公園。そういう他の全てより長い時間を、この屋上でお弁当を食べて過ごした。ここが僕らの居場所なんだ。

目を開く。スレインが見ている。この目が映しているのは、今この瞬間、僕だけ。

スレインが口を開いた。でも閉じて。また開いて、もう一度閉じる。目が一度空を映した。開く口。届く声。

「…僕もさ」

空色の声だ。

「…うん」

スレインは、眉尻を下げ、目を細め、口を不器用に引いて笑った。

伊奈帆、と呼ぶ声。いい名前だと。綺麗な風景だと言ってくれた僕の名前。

「僕も。満タンになったみたいだ」

三月Ⅱ　～卒業式～

学校に桜の木を植えるのは何故だろう。花が咲くのはほんの数日のことで、葉が茂り、枯れ落ちる桜と呼ばれず認識されない期間の方がずっと長いのに。

今年は早いな。咲くのも。散るのも。

「スレイン」

名前を呼ばれたので振り向くと、界塚伊奈帆がいた。桜の花びらを頭やら肩やらにくっつけて、桜の雨を浴びたみたいだ。

「…伊奈帆」

ぎゅ。

すたすたと近づいてきたと思ったら、無言でがばりと抱きつかれた。こいつの突拍子のない行動には慣れてはいるが、今日は特に顕著だ。理由は分かっている。だからされるがままになってやった。けど。

「…何だ？」
長い。
「いや…」
伊奈帆は力を緩めた。あんまり近くに顔があるから、なんか可笑しい。二人同時に吹き出す。
「桜の精かと思って」
は？
いつもの朴念仁はどこへ行った？というか今の発言はひどい。どうした。しかし、思い返せば以前からそういう傾向はあったかもしれない。
「…お前、時々すごく恥ずかしい」
伊奈帆は肩を竦めて笑った。
「自覚はしている」
そしてずい、と差し出された右手。
「第二ボタン、くれる？」
今日はこいつに笑わされてばっかりだ。
どこまでも意外性があって、面白いやつ。

「お前、案外古いな」
「伝統は大切だよ」
ブレザーのボタンは二つ。その、下のボタンを握り締めるものの、釈然としない。第二ボタンてのは、心臓の近くにあるから重宝されると思うんだけどな。
プチリ。
「ほら」
プチリ。
ん？
伊奈帆も自分の第二ボタンを千切っていた。糸が巻き付いたボタンを乗せた手が迫ってくる。
「はい」
「…？」
意図が分からず立ち尽くす。伊奈帆は力強く頷く。…いや、分からない。
「これが僕の心臓。君に預けるから」
君の心臓は、僕が預かる。
「これで、死ぬまで離れない」

手の中で交換される二つの第二ボタン。
受け取ったボタンは、自分のよりピカピカして、縁のメッキが点々と剥げていた。
スレイン、と伊奈帆がまた名を呼んだ。いつからだっけ。呼び捨てに慣れたのは。初めは先輩面してたんだけどな。
「四月から、姉が宿舎に入って僕一人になるんだ」
「お姉さんが？」
ユキという名の伊奈帆の家族。
「昇進して海外」
だからさ、と伊奈帆は目をぐっと閉じて、桜の景色と思い出をいっぱいに吸い込むみたいに大きく深呼吸して、そして言った。
「うちに、おいでよ」
風が桜の色を攫う。桜なんて毎年見ているはずなのに。初めて見るような気分だ。だからか。学校に桜を植えるのは。都合よく考えることも、案外悪くはないかもしれない。

二度目の春

コポコポコポ。
「スレイン、醤油取って」
「はい」
きゅ、きゅ。
「今日は、何時に帰ってくるの？」
もぐもぐ。ごくん。
「三時」
「早」
タン。
「午前で終わりだから。バイトもないし」
ごくごく、ごく。

「じゃあさ、デートしようよ」
「…ええ？」
「駅前で待ち合わせて、アイスでも食べに行こう」
ずずずずず…。
「アイスか」
「奢るから」
けらけら笑う明るい声。
「自分の分は、自分で出すよ」
ごちそうさま。うん。ごちそうさま。
「いいよ、行こう」
「やった」

エピローグ「私服と制服」

あとがき

この本を手に取っていただきありがとうございます。

アルドノア学園ではない、本編軍人囚人準拠の学園パラレル設定伊奈スレ本です。学園伊奈スレなのにアルドノア学園とは別時空をタルシスで走り出しています。学生ものの醍醐味、先輩と後輩を伊奈スレでやりたかったんです。学校での一歳差は圧倒的障壁ですから、そこをがんがん壊して乗り越えていく伊奈帆がやっぱり最高に年下攻めだなあって思います。

伊奈スレファーストキッスをどこに入れようかな～るんるん♪と書き始めたものの、書き進めるにつれいやいやそんな。この可哀想可愛いスレインにそこまで迫っていくのはなんか違う。徹底的にピュアで行こう、とブルドーザー並の強引さで路線変更をした結果、学園パラレルらしからぬ鬱で暗い喋ってばかりの話になってしまいました。ハッピーでピュアでちょっとえっちなラブラブ学園伊奈スレ…いつかリベンジしたいです。

◇イメージソング

❀春

「桜の足あと」藍坊主さん

✿夏

「夏色」ゆずさん

秋

「天の弱」164さんfeat.小野賢章さん

❄冬

「雪の音」Greeeenさん

✧二度目の春

「こころ」花江夏樹さん

四方山話にお付き合いいただきありがとうございました。次の本でもお会いできますように。

鳴海

先輩と僕

発行　Scramble/鳴海
発行日　2019.6.2/ZEROの方舟Osaka04
印刷所　（株）しまや出版様

Mail　jjncg720@yahoo.co.jp
Twitter　@narumiblue
PixivID　narumi07

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはご遠慮ください。